聖徒の道 1983年10月20日発行（毎月1回20日発行）第27巻第10号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 10 1983

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会
スペンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧　問
M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ビネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

編集長
M・ラッセル・バラード

国際機関誌
編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダーズ
デザイナー：
ロジャー・ギリング
レイアウト・デザイン：
マイケル・カワサキ

もくじ

決意と献身……[illegible]ニー……1
人の値……シ[illegible]ン……7
あるホームティーチャー……15
今の姿……イ[illegible]……18
6日目の奇跡……キー[illegible]ン……19
質疑応答……ラッ[illegible]……22
私たち夫婦の伝道……サミュエ[illegible]モンス……24
それは「西部」から……フィ[illegible]ース……26
熊の足跡……ディーン・[illegible]……30
主のともしび……ボイ[illegible]ー……35
アンデスのインディオに伝わる洪水伝説……[illegible]ンビー……48
モルモネード：うわさ話……53
小さなお友だちへ……ドウワン・[illegible]……54
どうしてだんじきにちようびがあるの……[illegible]ネル……58
ちえのひも／ワカサギつり……61
すくいぬしのあいにまなびましょう……ス[illegible]イル……62
チャーチニューズ／ローカルページ……66

■表紙説明：ソルトレーク・シティーのテンプルスクエア内にあるアッセンブリー ホールは建設されてから100年の歳月を経ている。開拓者の時代から現代に至るまでの様々な技術を取り入れて建てられたこの建物は，美しく，また機能的でもある。[illegible]月の総大会において再献堂され，会場として用いられた。（表紙）[illegible]センブリーホール内の新しいオルガンは3500本のパイプを有する。（裏表紙）

1983年10月号　聖徒の道　第27巻第10号
発 行 所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－10－30
電話　03－440－2351
印 刷 所　株式会社　精興社
定　　価　年間予約／海外予約2,200[illegible]
半年予約1,100円（送料共）
1部180円，大会号350円
International Magazine PBMA0620JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

大管長会メッセージ

決意と献身

第一副管長　マリオン・G・ロニー

私は決意と献身というテーマについて考えながら，古代の聖徒として，聖書やモルモン経に登場する数多くの偉大な人々のことを思いました。それは尊い神のみ業に献身した，非常に雄々しい人々です。私たちも皆，自分の献身を末日聖徒イエス・キリスト教会の水準にかなったものとするよう，固い決意をする必要があります。

それを鼓舞する意味で，私たちがこれからどういう点を伸ばしていったらいいか，例を挙げて説明していきたいと思います。

私の考えでは，モーサヤの息子たちが示してくれた模範に従うのが最良の方法だと思います。自分も彼らのように立派にやってきたなどと言うつもりはありませんが，これまでの経験から，彼らが取った方法は，従うすべての人々に良い結果をもたらすということを知っています。

モルモンは彼らについてこう書いています。「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで，神の道を知るために熱心に聖文を研究したから，すでに真理について深い知識を持つようになっていた。

そればかりでなく，かれらは非常に熱心に祈りと断食とをしたから『予言のみたま』と『啓示のみたま』とを受け，その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢とによって教えた。」（アルマ17：２－３）

これが神の教会の諸々の事柄を動かしている偉大な力です。これがなければ，ほかの何事も成功させることはできません。

モーサヤの息子たちには，神に属ける事柄を学ぶ固い決意ができていました。今，この学ぶという点において，末日聖徒以上にしっかりした心構えができている人々はいないのではないでしょうか。その決意の拠所となっているのは，次のような主のみ言葉です。主は私たちに「学修研究してあらゆる善き書に通じ，また諸々の国語と諸諸の言葉と国民とに通ぜよ」（教義と聖約

90：15)と言われました。それは，「人は無智にして救わるること」(教義と聖約131：6）がないからです。ここで言う無知とは真理に対する無知です。予言者ジョセフ・スミスも，「人は知識を得なければ，救われない」（*History of the Church*）と言っています。

主は，またこうも言っておられます。「神の栄光は栄智なり。」(教義と聖約93：36)そして，次は予言者ジョセフ・スミスの言葉です。「およそ，われらのこの世に於て達する栄智の一切は，何にてもよみがえりの時われらと共によみがえるべし。さればもしある人ありて，精励従順によりこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と栄智とを得ば，未来の世に於てそれだけ利を得べし。」(教義と聖約130：18－19)

再び主の言葉を引用します。「われ誠に汝らに告ぐ，汝らわが聖き書を急ぎ翻訳して，歴史の知識，諸国の知識，王国の知識，神と人の律法の知識を得，而してこれらをすべてシオンの救いのため得んことはわが欲するところなり。」(教義と聖約93：53)

ここで，全き献身に備えて不動の決意をすることの必要性について，少し考えてみましょう。

主はこう言われました。「汝ら神の役務に出で立たんとする者は，終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため，すべからく心をつくし，勢力をつくし，思いをつくし，体力をつくして神の役務をなせ。」(教義と聖約４：２）

皆さんは，次のニーファイの物語を御存じのことと思います。兄たちはエルサレムに行って，彼らの系図が入った真鍮版を手に入れるようにと父から言われた時，不平を鳴らしましたが，ニーファイはこう言いました。「私は主が命じたもうたことを行って行なう。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」(Ｉニーファイ３：７）

エルサレムに着いて，まずその記録を手に入れる責任に当たったのがレーマンです。彼は不承不承レーバンの所へ行きましたが，記録を得ることができずに戻ってきました。そこで彼らは，「自分らの相続した土地へ行って……金銀そのほかの貴重品を取り集め」（Ｉニーファイ３：22)，それで真鍮版を買おうとしました。ところが，彼らはそれをレーバンに奪い取られ，命からがら逃げ出さざるを得ない始末でした。城壁の外に来て，レーマンとレミュエルはニーファイを棒で打ちました。ふたりは真鍮版を得ないまま，父親の所へ戻ろうとしました。天使が現われて，自分たちの非を正された後でもなお彼らは不平を鳴らし続けました。（Ｉニーファイ３：28－31）しかし，ニーファイはこう言ったのです。

「私たちは，またエルサレムまで引き返そうではないか。そして主の命令を忠実に守ろうではないか。ごらん，それは全世界が向っても主の強さにはかなわないからである。それなら，どうして主がレーバンとその家来の五十人よりも強くないことがあろうか。いや，レーバンに何万人あっても主の強さにはかなわない。」（Ｉニーファイ４：１）

そして，ニーファイは城壁の中に入り，

ニーファイは，兄たちの怒りを買い，また真鍮版を得るためにレーバンを殺すようにとまで命じられたが，何があっても主に従うと固く心に決めていました。

真鍮版を持って帰ってきたのです。後にも，ニーファイは船を作り始めた時，兄たちの反対に遭い，悲しい思いをしました。兄たちはニーファイが落胆していると思いました。しかし，それに対するニーファイの返事は，次のような素晴らしいものでした。「もしも神が私にするように命じたもうならば私はあらゆることをすることができる。」（Ｉニーファイ17：50）

ニーファイは自分に与えられた使命を成し遂げました。それは，彼が固い決意の下に，すべてを尽くして献身したからです。

神の救いの計画の意義と，イエスのほかに「人間に救いを与えることのできる名は断じて天下にないこと」（IIニーファイ25：20）を理解したパウロには，それ以前に持っていた知識はすべて無意味なものとなりました。パウロの改宗は心からのものでした。彼はすぐに，福音のおとずれを同胞に伝えようと固く心に誓ったのです。

それはアルマの場合も同じです。彼は心を改めて以来の自分の生活について，こう言っています。「私は人々を悔い改めさせ，私と同じ喜びを感じさせるために，またこれらの人も神によって生れ聖霊に満されるようにたえずはげんで働いていた。」（アル

マ36：24)

アルマの行ないを伝える記録を読むと，その言葉が真実であることが分かります。彼は行政長官ともいうべき大判事の職を辞任しましたが，それは「民……の中を巡ってあるいて，神の道を民に宣べ伝え，民にその義務を思い起させてふるい立たせ，神の道をもって民の間に行われるあらゆる傲慢と狡猾と不和とを抑えようとしたためであった。全く純粋な証詞を以てこれを責めるよりほかに民を改心させる道がないと思えたからである。」(アルマ4：19)

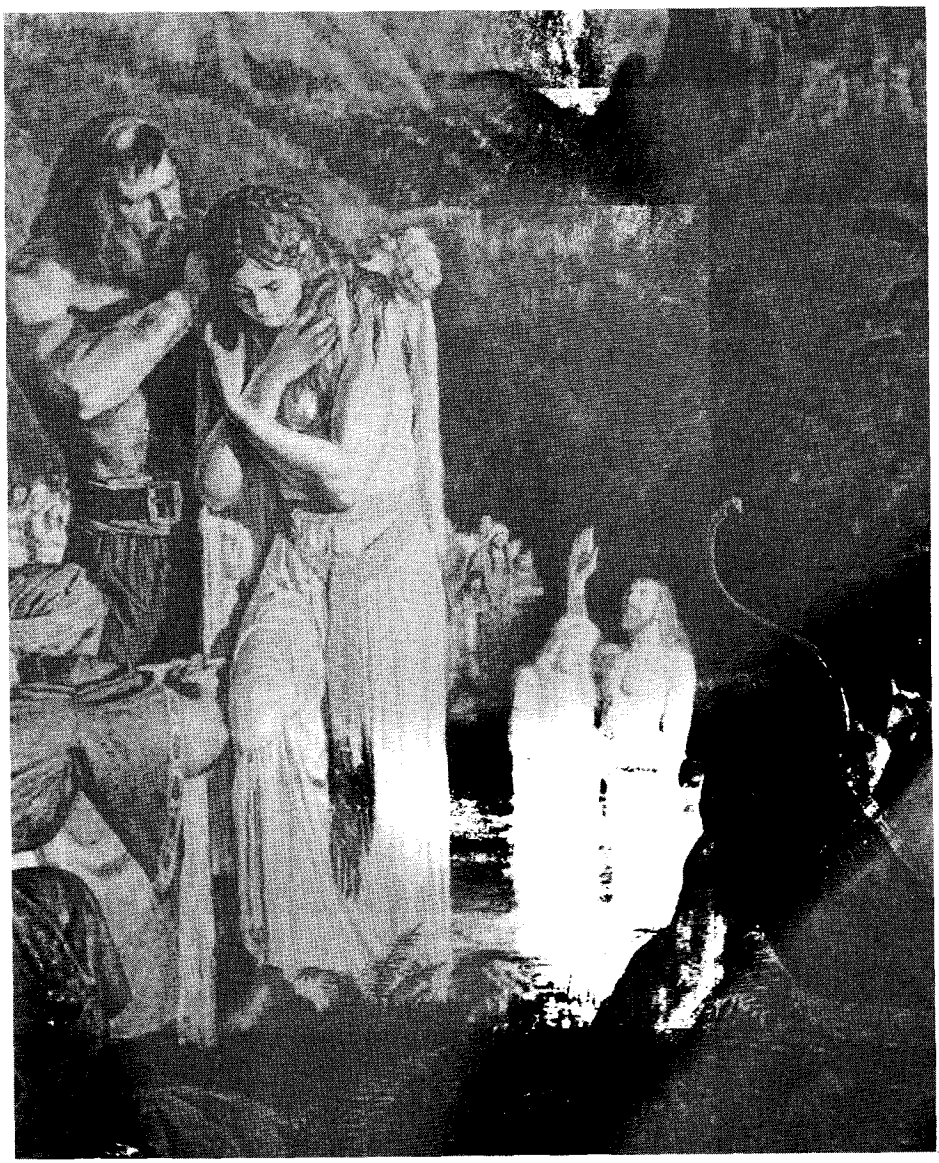
だからといって，毎日の仕事を投げうってまで，教会の責任にすべての時間を捧げなさいというのではありません。それは，特にそういう職に召された時に行なうことです。私が言いたいのは，救いの計画について学び，それが現世と来るべき永遠の世において，平安と幸福を得るための唯一の道であることを理解しなければならないということなのです。私たちは何をおいても，言葉と行ないを通して，世の人々に神に対する知識と証を伝えるよう，固い決意をしなければなりません。それは，人々が福音を受け入れ，自分のものにできるようにするためです。

私たちは聖典を学び，主が予言者を通して救いの計画について啓示してこられた事柄を理解しなければなりません。また，毎日朝と夜の祈りを欠かすことなく，福音の教えに忠実に従うことによって，福音がもたらす平安と活力を得る必要があります。私たちは熱心に，また特に意識してそれを求め，聖霊の力によって，福音の神聖な真理に対する証を得，保ち続ける必要があります。真の改宗をし，福音に自らを捧げ，生活のすべてにその影響が現われてくるようにしなければならないのです。そして，何を決めるにしても，行なうにしても，その是非の判断は，必ず福音の光に照らして行なわなければなりません。そうするならば，心を悩ます疑いや現代の様々な問題によって，判断や行ないを誤ることはなくなるでしょう。

例えば，安息日の仕事やレクリエーションなどの問題についても，正しい判断ができるようになるでしょう。救いの計画を受け入れた社会に，日曜日の営業を禁止する法律は要りません。安息日に商売をしたり，買い物をしたりする人はいなくなるでしょう。また，中絶禁止法を定める必要もありません。わいせつな読み物や映画，人を堕落させる娯楽もなくなることでしょう。人種偏見，社会問題も姿を消すようになります。

皆さんが，福音の教えを基準にして物事を決め，行ない，また，救いの計画に照らして，日々直面する様々な事柄を判断するよう望むものです。世界のどこを捜しても，これ程大切なものはほかにありません。この素晴らしい計画は，人類を贖い，神のみもとに救い，昇栄させるために，初め天上において定められたものです。私たちはこの計画がもたらす祝福にあずかるにふさわしい生活をすべく，心を決める必要があります。私たちは皆，それぞれに求められている事柄を実行すべく決意し，それに従った生活をしなければなりません。日々の仕事がどのようなものかにかかわらず，私たちは救いの計画の精神を理解し，それに

「私は人々を悔い改めさせ,……またこれらの人も神によって生れ……るようにたえずはげんで働いた。」



従った生活をするよう求められています。私たちは，自分が仕え，あるいは接触する人々に，良い影響を及ぼし，その人々が真理を見いだす助けをすることもできます。

それを行ない，最後まで続けるための最良の方法は，イエスがなされたように，何があっても御父のみこころを行なうと決意することです。主がなされたことのひとつに，御自身に対する御父のみこころをよく知るということがあります。そして最も大切なのは，祈りを通して御父と交わられたということです。イエスがこれをなされたのは，御父のみこころを知るためだけでなく，御父のみこころを行なう力を得るためでした。イエスは地上で導きと教えを施しておられた時に，祈りをせずに大切な決定を下したり，重大な局面に対処したりすることは決してなかったと思います。

私たちはゲツセマネの苦悶の記録から，天父のみこころを行なうのは，必ずしも易しく，心地よいことばかりではなかったということが分かります。しかし，イエスは天父のみこころにはいつも従われました。

そして主はこの最後の神権時代に，御自身が地上におられた時に断固として行なわれたように，神のみ業に専心し，戒めに完全に従うことの大切さを教えてこられました。

イエスが言葉と行ないによって示された模範に従うことは賢明なことです。

「われに『来よ』という
救い主にゆかん
一人では居(お)られず
み子よ，共にあれ」（讃美歌77番）

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングの時，以下の点を強調するとよい。

1．今，この学ぶという点において，末日聖徒以上にしっかりした心構えができている人々はいないのではないのでしょうか。私たちは，皆自分自身のためにその心構えをする必要があります。
2．私たちは，世の人々が福音を受け入れて自分のものとすることができるよう，神に対する知識と証を伝えるという，固い決意をしなければならない。
3．何を決めるにしても，行なうにしても，その是非の判断は，必ず救いの計画という光に照らして行なわなければならない。
4．福音に従順な生活を行ない，最後まで続ける最良の方法は，イエスがなされたように，何があっても御父のみこころを行なうと決意することである。

話し合いのための提案

1．イエス・キリストの福音に対する決意と献身という点について，自分の経験や感じていることを話す。
2．このメッセージの中に，家庭で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3．話し合いをより充実したものとするために，訪問する前に家長と話し合っておくとよい。定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

人の値

教会から足を遠ざけている会員を担当するホームティーチャーのために

七十人第一定員会会員　ジョセフ・B・ワースリン

イエスは地上におられたある時，次のように教えられました。

「あなたがたのうちに，百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹の羊がいなくなったら，九十九匹の羊を野原に残しておいて，いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。

そして見つけたら，喜んでそれを自分の肩に乗せ，家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め，『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うであろう。

よく聞きなさい。それと同じように，罪人がひとりでも悔い改めるなら，悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが，天にあるであろう。」（ルカ15：4－7）

このたとえ話は天父にとって一人一人の人間が貴い存在であることを教えています。

現在，社会がますます複雑化するにつれ，数多くの力が結集して，人間は価値のない，つまらない存在だという考えを人々に植え付けようとしています。官庁，大学，銀行などのファイルの中の，ただの番号にしか過ぎないというところまで，人の値を落としめようとしているのです。その結果，人人の間には，人生は水に浮かぶあわのように，何の価値もないものだというような考えが広がりつつあります。天父の愛を理解する必要性が，これほどに強い時代はかつてありませんでした。主の前には，すべての人は不変の価値を持つ存在です。次に挙げる，人の値を強調した教えは，予言者ジョセフ・スミスを通して与えられたものですが，この教えは科学上のいかなる発見よりも，またわずかばかりのこの世の知恵を集めたものよりも大切なものです。

「而（しか）して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し，唯（ただ）一人の人たりともわれに導かば，わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦（よろこ）び如何（いか）ばかりぞや。

さて，御父の国にわれの許（もと）に導きたる唯一人の人につきて汝らの悦び大いならば，汝らもし多くの人を導き来らばその悦びは果（はた）して如何ばかりぞや。」（教義と聖約18：15－16）

ひとつの現代のたとえ話を紹介したいと思います。そこに主人公として登場する農夫は，かつてない豊作に恵まれ，その収穫から得たお金でどのような財産を買うかということばかり考えていました。彼は毎日のように，畑に行って満足気に黄金色の穂波を眺め，家に帰ってくると大得意で，今に金持ちになるぞと家族に話して聞かせていました。

彼には病気の小さな子供がひとりいました。その子が父親に，畑に連れていって，実りをつけた広い小麦畑を見せて欲しいと言いました。父親はその願いを聞き，子供を暖かな着物にくるんで，外へ連れていきました。ところが，目の前に広がる宝に気を奪われていた父親は，子供が自分の側から離れたことに，すぐに気が付きませんでした。しばらく経って子供が見えないのに気付いた彼は，小麦畑の中にその姿を捜しました。しかし，小麦の穂は子供の背丈よりも高く，影も形も見えません。父親は狂乱したように，村へ走っていき，近くの人人の助けを求めました。それを聞いてすべての人が集まりました。そして，手をつないで畑を囲むように大きな輪を作り，茂り合う小麦の穂を踏みしだきながら，ゆっくりと前へ進んだのです。やがてその子供は冷たい体となって見つかりました。父親は掛け替えのない息子の死に打ちひしがれ，嘆き悲しみました。彼はこの世の富よりも大いなる人の値に気付かされたのです。

(Sidney H. Alexander, Jr., "Today's Crises," *Vital Speeches,* 1 Jan. 1963, pp. 185－86)

私たちは神の子供としても，人の値の大いなることを理解する必要があります。教会は，死者の救いの業を進めています。また，数多くの若人とやる気のある会員を伝道に送り出し，良き羊飼いの声に耳を傾けようとしている人々を集めようとしています。そして，そのために莫大なお金と時間を費やし，私たちのメッセージを受け入れる人を捜しています。

しかし，人を捜すという点において，私たちはもうひとつの大切な責任を与えられています。一度バプテスマを受けながら，教会を遠ざかっている人々を捜し，活発にするという責任です。これは，羊を見つけ出すように簡単にはいきません。羊の足跡はまだはっきりしていて，跡をたどるのも楽ですが，この人々を教会から遠ざからせた心のはずみや真の動機となると，なかなかそうはいきません。その中の非常に多くの人々は，人生に関する福音の計画の霊的な価値に無頓着です。私は，よく「不活発会員」と言われるこれらの神の息子，娘たちのことを心配しています。この人々も教会にとっては大切な存在なのです。

多くの場合，この人々と教会との接触はホームティーチャーを媒介として行なわれています。ホームティーチャーは監督とメルケゼデク神権定員会の指導者の指示の下に働いています。ホームティーチングというこの大切な責任に私が関心を持ち始めたのは，まだ若い頃のことでした。

準備と心構え

まだ伝道の準備をしていた若い頃のことです。私がいたワード部の監督は素晴らしい人でした。その人の名前は，マリオン・

私は，よく「不活発会員」と言われるこれらの神の息子，娘たちのことを心配しています。

G・ロムニー。今は副管長として働いておられます。ロムニー監督は，私と同僚にホームティーチングの責任を与える時に，謙遜さと祈り，また，担当家族の心を奮い立たせる霊的なメッセージを準備することの大切さを強調しました。そして，そのホームティーチングの責任を果たしていく時に，様々な機会を通して大きな喜びが与えられると約束してくれたのです。割り当てられたのは5軒の家族で，その中の3軒が教会に来ていない家族でした。ロムニー監督の熱意と関心は間もなく，私たちを完全に感化しました。ロムニー監督にとって，このホームティーチングの割り当てはそれほどまでに大切なものだったのです。その責任を果たすに際しての彼の入念な指示は，私たちの心に強く残りました。そして私たちはその霊感あふれる勧告に忠実に従いました。何度も訪問を重ねる内に，教会に来ていなかった家族も含めて，すべての担当家族と心から打ち解け合うようになり，最終的にはすべての家族が活発に教会に集うようになりました。

ロムニー監督は，このホームティーチングの責任が重要なものであることを，私たちに教えました。彼は私たちに，よく準備し，訪問の効果について真剣に考えるように励ましを与えました。そして，私たちの希望と信仰を深めて，より良い働きができるように助けてくれたのです。私たちは，覇気と自発性がなければ，どのような責任に就いても，絶対に成功は望めないということと，また，教会に来ていない会員へのホームティーチングを成功に導くための最も大切な要因は，ホームティーチャー自身であるということを教えられました。ホームティーチャー自身の備え，打ち込み方，心構え，積極性が極めて重大な要素となるのです。

親しい関係

何年か前，私のある友人がステーキ部宣教師に召されました。彼はかなり大きなスーパーマーケットを経営していましたが，客のひとりに，その地域ではかなり名のある，裕福な老婦人がいました。私の友人は彼女に心からの関心を寄せ，店を利用してくれることへの感謝の念をあらゆる形で示し，彼女に頼まれたことは何でもするように務めました。買物を終えた彼女の荷物を必ず自動車まで運び，ドアを開け，見送るようにしました。いつも笑顔を忘れず，丁寧で親切な言葉をかけ，別れ際には親しみを込めて手を振りあいさつをしました。彼女も善意に満ちた親切な態度に接して，彼に良い印象を持ちました。

ある夜彼は，ステーキ部宣教師として同僚と一緒に戸別訪問をしていた時に，驚いたことに，偶然にも彼女の家のドアをノックしました。初め彼女はドアを少し開けて用心深そうに外をうかがいましたが，そこに立っていた人を見ると，ドアを開け放して，「まあ，だれかと思ったら，あなただったの」と声を上げました。

彼は商売上のことではなく，末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師として訪問したことを彼女に説明しました。すると彼女は，自分は別の教会の会員で，それまで何年もモルモン教会の宣教師の訪問を受けていたが，話を聞こうともしなかったし，興味もなかったと答えました。でもこの時は違いました。「あなたなら話は別よ。どうぞお入りになって。あなたのように紳士的で立派なクリスチャンが言うことだったら喜んで聞かせていただくわ。」

ここから彼女の改宗談が始まるわけですが，すべてを話す必要はないでしょう。彼女がバプテスマを受け，今も教会を愛しているというだけで十分だと思います。彼女が改宗したのは，この素晴らしい末日聖徒によって心を和らげられていたからです。

彼の経験は，心をかたくなにしていると思われる人々の心を動かすには，宗教や教会のことを切り出す前に，親しい関係を築いておく必要があるということを教えてくれています。初めに，良い感情を基とした関係ができているなら，恐れ，疑い，敵意などを取り除き，福音の理解と改宗へと道を開くことができます。

教会に来ていない会員の活発化という，この素晴らしい責任を遂行する上で重要な3番目の原則は，好機を逃さず事を行なうということです。聖典にはそのことが次のように書かれています。

「天が下のすべての事には季節があり，すべてのわざには時がある。

生るるに時があり……植えるに時があり，植えたものを抜くに時があ」る。（伝道3：1－2）

ステーキ部宣教師をしていた私の友人がもうひとつ，なるほどと思わせる体験をしています。彼はその経験を通して，人間をいつまでも固定的に見ていてはならないということを学びました。人間は石ではありません。絶えず変化しているのです。

ある医者がいました。私の友人はホームティーチャーとして彼に働きかけようとしましたが，拒絶されました。その医者は名前だけの教会員でした。彼の家のドアは，教会員に対して固く，永遠に閉ざされていたかのようでした。ある夜，私の友人は病院に行き，そこであの頑固な医者がベッドに横たわっている姿を見て，驚き，悲しみました。彼は心を謙遜にし，思い切って言いました。「お望みでしたら，祝福の儀式をしますがどうですか。」

すると衰弱して元気を無くしていた医者がこう答えました。「是非頼みます。今の私には一番の助けになります。」以来彼は再び活発に教会に集うようになったということです。すべての人にそれぞれの時があるようです。もし神のみたまのささやきがあった時は，それに従わなければなりません。

私たちの人生には，生活を変え，霊的な優先順位を考え直すきっかけを与えてくれる様々な出来事があります。それは今教会に来ていない会員にも言えることです。皆さんがホームティーチャーとして担当しているそのような人々も，大きな困難に直面したり，自分自身や子供たちの生活に重大な出来事が起きた時に，心を和らげるかも知れません。彼らの近くにいて，好機が訪れた時に，彼らの生活に霊的な影響力を及ぼすことができるよう備えて下さい。

霊的な目覚め

イエス・キリストの福音に対する霊的な目覚めは，再活発化の道を歩む上で最も大きな力となるものです。ホームティーチャーとしての働きをこの点に集中させるようにして下さい。皆さんが担当する教会に来ていない夫婦を，ワード部やステーキ部で行なわれている神殿準備セミナーに招くよう，定員会の指導者や監督と調整して下さい。そのセミナーには皆さんも一緒に出席し，ホームティーチングで訪問した時には，質問に答えたり，セミナーへの出席を続けるよう励ましたりして，継続的に関心を示すようにして下さい。

もし担当家族にセミナーに出席する気がない場合は，週に1度彼らの家で，福音の原則を学ぶ時間を取れないかどうか尋ねてみて下さい。ホームティーチャーはそこで，福音の原則に関する体系的なレッスンをします。このレッスンは短い時間（30分から45分）で行ない，テキストとしては，「神殿準備セミナー」(PBMP0101JA),「家族のための求道者標準教育法」(PBMI8461JA),「福音の原則」(PBIC0245JA) などを用いるとよいでしょう。自分の家で福音を学ぶというこの提案は，多くの家族に受け入れられると思います。

ただしこの場合，何かを約束させたり，急激な行動の変化を期待して，精神的な圧迫をかけてはいけません。彼らが自分自身で，皆さんから学んだ真理を成長の糧とし，また，知識と霊的な力を増し加えているという実感を味わえるようにして下さい。福音についての知識を深めるにつれ，自分で目標を設定し，新たな生活への心構えをするようになった人々が数多くいます。

週に1度の訪問先でのレッスンは，その家族が霊的な独り立ちをするまで続けて下さい。数週間でそうなる場合もありますし，何カ月もかかる場合もあります。

父　親

父親に的を絞って下さい。父親が活発になると，他の家族もその影響で，同じ行動を取るようになります。ホームティーチャーとしての訪問や，家族との活動について，父親と話し合って下さい。父親から指示を求め，また依頼されたことは，慎んで引き受けて下さい。担当家族の家にいる時は，だれが祈るか，何を教えるか，どのような提案をするかについては，父親の指示に従うようにしなければなりません。

責　任

状態をよく観察し，適切であると判断した場合は，担当家族に教会の組織の中で働く機会を与えるようにして下さい。確かに，担当家族にはホームティーチャーの愛と奉仕が必要ですが，同時に，彼らには，自分で働き，参加することによって成長していく機会も必要です。定員会は必要に応じて，活発なメルケゼデク神権者を長とする委員会を組織するよう求められています。委員長は定期的に会長会へ報告を行なう必要があります。各委員会には，2，3人の活発な兄弟のほかに，あまり活発でない兄弟をひとり召すようにするとよいでしょう。教会に行きませんかという漠然とした誘いには反応を示さなかった兄弟たちが，彼らの関心事を考慮に入れた，委員会で働くとい

う具体的な要請には応えるというケースが少なからず出てくるようになるでしょう。そうなれば，彼らは新しい関係を結び，福音の中で成長し，教会の霊的な責任を通して，さらに自分を深めることができるようになります。

忍　耐

担当家族の再活発化には，それを達成するまで長い間忍耐して働かなければならな

確かに，担当家族にはホームティーチャーの愛と奉仕が必要ですが，同時に，彼らには，自分で働き，参加することによって成長していく機会も必要です。

い場合もあります。聖書には，「怒れる兄弟は堅固な城よりも近づき難い。」（欽定訳箴言18：19）と書かれているほどです。成長の速度は人それぞれに違います。活発になるまで長い時間を要する人もいるのです。忍耐をもって，そのような人々に接して下さい。この仕事を成し遂げるには時間が必要です。

霊的な導き

活発化とひと口で言っても，ただひとつの方法で，すべての人に対応できるわけではありません。活発でなくなった理由は，人によって様々に異なります。ですから，担当家族の活発化を計画する場合は，相手の必要に応じて，慎重に，また祈りの気持ちをもって行なうようにして下さい。彼らの心を和らげる方法を御存じなのは，主だけです。教会には，自分たちに関心を向け，励ましてくれる兄弟姉妹を必要とする会員がたくさんいます。活発でない教会員に対して，ホームティーチャーは大切な責任を負っています。しかし，その一端は，教会のすべての会員，組織にも与えられているのです。スペンサー・W・キンボール大管長はこう言っています。

「不活発と無関心の風潮が両親から息子娘へと循環しています。今こそ，私たちはこの循環を立ち切らななければなりません。私たちはさらに多くの若人に手を差し伸べて，支え，彼らが従順な生活をし，伝道に備え，聖なる神殿で結婚をするよう導かなければなりません。それと同時に，さらに多くの父親，母親にも手を差し伸べ，支えなければなりません。」（Regional Representatives Seminar, 30 September 1977）

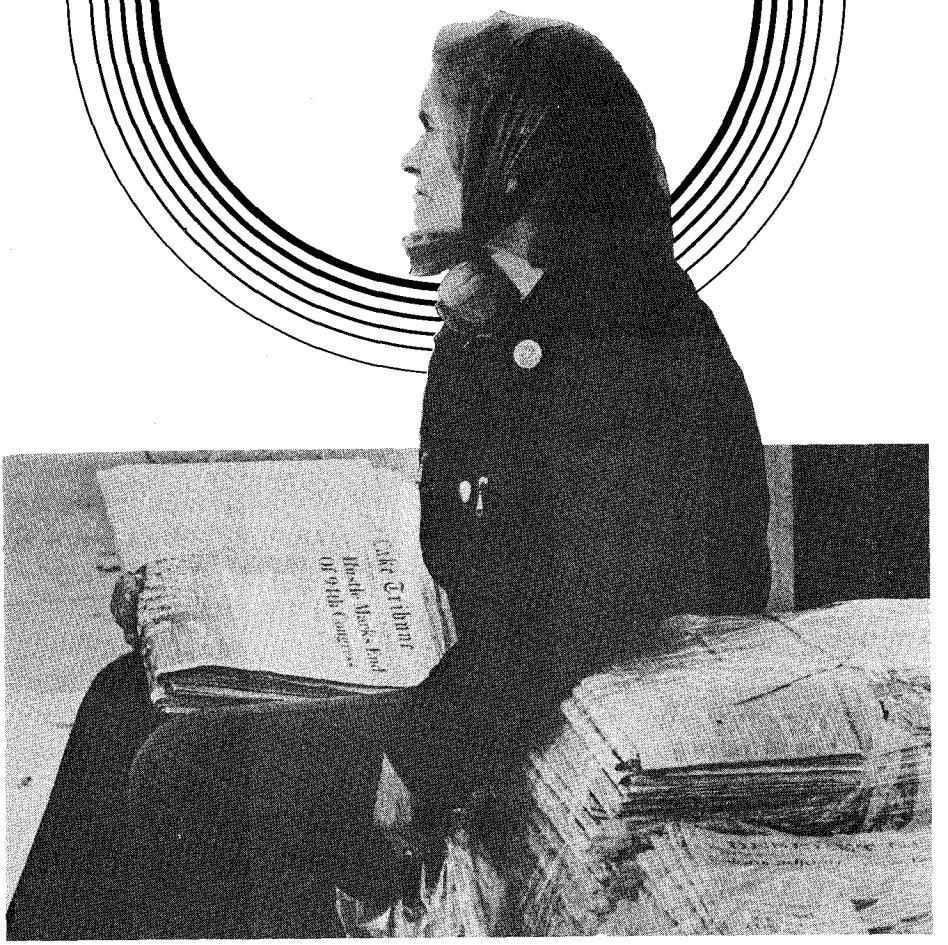
私たちは個人として，また組織として，活発でない兄弟姉妹に手を差し伸べる時に，次のことを覚えておかなければなりません。「失意の人にとって，住む所や，パンよりもはるかに大切なもの，それは……この世の中での，人と人との触れ合い。」（Spencer Michael Frees, "The Human Touch," *A Treasury of Inspiration*, ed. Ralph L. Woods, New York: Thomas Y. Crowell Co., 1951, p. 327）確かに，人と人との触れ合いは，効果的なホームティーチングを行なうための出発点です。しかし，もうひとつ必要なものがあります。「神との触れ合い」です。それは教える側にも，教えを受ける側にも必要なものです。

この責任を，熱心に，また効果的に，そして元気よく果たしていくなら，イエス御自身が語られたあの喜びを味わうことができるでしょう。

「『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』……

よく聞きなさい。それと同じように，罪人がひとりでも悔い改めるなら，悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが，天にあるであろう。」（ルカ15：5－7）

あるホーム
ティーチャー



彼女の表情，振る舞い，言葉の中には，自分の人生と身の回りの人々に対する苦々しい思いが見て取れました。彼女は父親やある人々に怒りを抱いていました。

ジェイ・ライアンがホームティーチャーとして割り当てられたルース・エリオット姉妹は，ワード部に転入してきてまだ日が浅く，どんな人なのかよく分かりませんでした。それでも，他のワード部に住んでいる彼女の娘や，彼女について知っている人たちから話を聞いて，初めての訪問をする前に少し情報を得ることができました。

エリオット姉妹が住んでいたのは小さなアパートで，良い隣人たちに恵まれていました。彼女の部屋は元はひとつの寝室だった部屋を改造したもので，専用の出入り口が付いていました。物置部屋だった所に料理用のストーブと流しを付けて，台所として使っていました。部屋にはかなり傷んだ布張りの椅子がひとつ置いてあり，エリオット姉妹は，寝る時以外の時間はそこに座って過ごしているのが普通でした。彼女は外の世界に興味を示すことがなく，ほとんど外出はせずに，閉じこもり切りの毎日を送っていました。

エリオット姉妹はタバコを吸い，その上薬漬けの生活でした。長い間，医者からかなりの薬を与えられ，それを飲み続けていたのです。そして彼女の表情，振る舞い，言葉の中には，自分の人生と身の回りの人人に対する苦々しい思いが見て取れました。彼女は父親やある人々に怒りを抱いていました。特にひとりの教会員との間に不愉快な出来事があり，それによって心に深く傷を負っていました。そのようなわけで，彼女の生活には喜びというものが感じられませんでした。ライマン兄弟は，どうしたらこの不幸な姉妹を最もよく助けることができるかを，熱心に祈り，尋ね求めました。彼女のホームティーチャーとして召されて間もなく，ひとつの機会がやってきました。彼女のアパートの経営者が，アパートの塗装をすると言ってきたのです。それでエリオット姉妹も家財道具をひとまずテラスへ出しておくように求められました。ライマン兄弟とワード部の大祭司グループリーダーが，その荷物の出し入れを行ないました。エリオット姉妹には家財といってもほとんど何もなく，その貧しい暮らしぶりを見るのはつらいことでしたが，ライマン兄弟たちはこうして彼女の役に立つことができたのです。

ある時，エリオット姉妹は家族の所を訪れるということで数日アパートを留守にしましたが，その間に，ライマン夫妻は彼女のアパートのあの椅子を預りました。枠組はしっかりしていましたが，表張りの布と詰め物は新しく変えなければならない状態でした。ライマン姉妹がそれを上手に直し，エリオット姉妹が帰ってくる前に，彼女のアパートに戻しておきました。

ライマン兄弟は同僚との定期的な訪問のほかに，夫婦でもよく訪れ，福音について話したり，短な祈りをしたりしました。エリオット姉妹もだんだんと彼らを受け入れ，打ち解け，親しみを深め合うようになりました。

ある春の頃，エリオット姉妹は手術を受けなければならないことになりました。ライマン夫妻は，手術を前にした彼女のために多くの時間を取って，電話で話したり，直接合って話したりしました。そして，教会，病院，買物などへも連れて行きました。毎日のように接触を取りました。しばらくの間エリオット姉妹から毎晩遅く電話がかかってくることがありました。寂しくて，だれか話を聞いてくれる人が欲しかったのです。そして，ライマン夫妻は何とか彼女の心のすきまを埋め，助けを与えることができました。

エリオット姉妹が手術で入院している間に，ライマン姉妹は休暇を取りましたが，病院に電話をかけ，励ましの言葉をかけ，元気付けようとしました。エリオット姉妹は神権の祝福を受け，主がみ守って下さるという気持ちを感じました。手術後，彼女はタバコをやめようと心に決め，事実その通りにしました。伝道に出る前の孫からタバコをやめるように言われていたのですが，主の助けと，孫を喜ばせたいという気持ちが，それを成し遂げさせたのです。

時間が経つにつれ，エリオット姉妹には新しい友人ができ，外の世界にも関心を向けるようになりました。教会への出席回数も増え，什分の一も納めるようになりました。ライマン兄弟は彼女の什分の一年末面接についていった時のことを今でも覚えています。初め彼女は，体の具合が悪く，行きたくないと言っていたのですが，ライマン兄弟に，自動車で迎えに行くから，用意をしておいて欲しいと言われました。しかし，それを終えて帰る時の彼女の顔は喜びで輝いていました。彼女にとって什分の一を完納した経験はそれが初めてだったのです。

人生に対する彼女の態度は大きく変わりました。苦々しい思いは消え，謙遜さと悔い改めの精神がそれに取って替わりました。自分を傷つけた人々を赦せるようになり，子供たちとの関係も良くなりました。彼女自身が子供たちに寛容さと愛を持って接するようになった結果，子供たちの態度や振る舞いにも変化が出てきたのです。

エリオット姉妹はやがて新しいアパートに移り，部屋をきれいに飾り付けました。同じアパートの住人の中から新しい友人も見つけました。新しく替わった医者は，彼女の薬漬けの状態を治そうと，彼女自身の体にある治癒(ちゆ)力を用いて病気を克服した方がよいと言い，薬の使用をやめさせるようにしました。この医者の熱意と神権の権能による祝福と励ましによって，彼女はつらい禁断症状の期間を乗り切ることができました。

新しく生まれ変わったエリオット姉妹には，家族や友人と共に神殿の儀式にあずかるなど，数々の祝福が与えられました。ライマン兄弟はこう言っています。「彼女のホームティーチャーとして働く責任が与えられてきたことに心から感謝しています。私は今のエリオット姉妹と同じくらいに，昔のエリオット姉妹についてもよく知っています。でも今では，貧しくて，物寂しい彼女の生活を見て，悲しい気持ちになるようなことはありません。今の彼女の生活は喜びで一杯です。福音に忠実な人にもたらされる祝福があふれています。」

今の姿

イベット・トレーシー

私の父は教育もあり，多くの才能に恵まれていた人でした。主イエス・キリストに対しても肯定的な気持ちを持っていました。しかし，私が子供の頃から，父は酒浸りの生活で，私は酔っていない父の顔を見たことは一度もなかったような気がします。父が定職を失った時の事を覚えています。その時，父は数日の間，臨時雇いの仕事を幾つか掛け持ちし，わずかに酒代を稼ぐような生活を繰り返していました。父の深酒は私をとても悲しませました。私は父が酒をやめられるように力を下さいと何度祈ったか分かりません。

そしてある時，その祈りがかなえられたのです。それは父自身の死の4カ月前のことでした。父は完全に酒を絶ち，新しい生活を始めようと努力しました。もう一度，職に就き直そうともしていました。父の死後数カ月経ったある夜，私は父が何か壇のような所に座っているのを夢の中で見ました。父は私を見ると笑いかけました。その顔は喜びで輝き，とても幸せそうに見えました。父の近くには白い着物の人が何人かいましたが，私の知らない人たちでした。その夢は私の心に深く残りました。地上であれ程無責任な生き方をしていた父が，どうしてあのような平安で幸福な状態でいられるのか私には分かりませんでした。父は母と6人の小さな子供たちを放っておき，男親の義務などひとつも果たしてはいなかったのです。ほかの人から父について尋ねられた時，私は悪い父親だったと答えるのが常でした。

その後，私は別の夢を見ました。夢の中で，私は家の戸口の階段の所で父と話していました。父は酔っていました。顔は青ざめ，ひどく汚れた服を着ていました。私はどうして酒ばかり飲んでいるのとののしり，二度と家には戻って来ないでと大声で言いました。その時突然，別の人が私の方にやって来ました。その人も私の父でした。しかし，きれいな服を着て，顔は輝き，目には安らぎの表情をたたえていました。そして，別の父を指差してこう言ったのです。「この人はかつての私の姿。今の姿はこの私。」

その時の私の喜びは，とても言葉では言い尽くせないものでした。その夢は最初の夢に対する答えでした。私の父は死ぬ前に，本当に生き方を変えていたのです。父はずっと続いていた酒との闘いに勝利を収め，悔い改めていたのです。

私はその時以来，父が平安を得て，進歩成長していること，また，信仰と悔い改めこそ真の幸福につながる道だということを思っては，心に喜びを覚えることがよくあります。どれほど深い罪と不幸の状態にあっても，私たちは生活を変えることができます。救い主の贖いがそれを可能にしてくれたのです。

6日目の奇跡

キャロライン・トンプソン

北西フロリダの小さないなか町で過ごした私の子供時代は，とてもつらいものでした。私が6歳の時，父が事故で失明しました。すでに母を失くしていましたので，食事の準備や家事は私の責任になりました。それは生易しいものではありませんでした。でも，私たちは何とか耐え抜きました。私たちの家族はある教会に属し，私もそこへ出席していましたが，様々な活動に自分も参加しようという気持ちはなく，よく休んでいました。

数年経ち，ちょうど17歳になった兄は一兵卒としてベトナムへ行きました。そしてその翌年，父はまた事故に遭い，今度は命を落としてしまったのです。私も車の下になった父の体を見ましたが，自分が発狂してしまうのではないかと思いました。間もなく私と姉は郡判事に呼ばれ，私たちを預かってくれる家族が見つからないということを告げられました。そうなると，行く先は孤児院しかありませんでしたが，その前に姉が結婚し，私もその後を追いかけるように，間もなくベンと結婚しました。私たちが住んでいたその地方で，若い夫婦が暮らしを立てていくのはとても大変なことでした。それで，ベンの叔父が来て，インディアナへ来ないかと誘われた時，私たちはその助言に従いました。しかし，インディアナでも，幸せとは縁の遠い毎日が長く続きました。故郷を1600キロも遠く離れた私たちにとって，そこはまったくの異郷の地でした。

そのような精神状態でいた時に，姉から手紙がありました。そして，子供ができたということを知らされ，私はとても驚きました。私は前から絶対に子供は作らないと決めていました。私は人生をとても悲観的に見ていて，自分が育ってきたような世界に，子供を生まれさすことはしたくないという気持ちでした。しかし，間もなく私は心の中に何か訳の分からない痛みを感じ始めるようになりました。私は何か，これだけは自分のものと言えるものを求め，それにすがりたいと思っていたのです。そして私はついに自分の考えを変え，思い切って子供を作ろうと思いました。まだ恐れがあって確信は持てませんでしたが，わずかに期待感のようなものもありました。

妊娠期間中のほとんど，ひどいつわりが続き，私は時々，自分の決定が正しかったのかどうか疑いました。しかし，看護婦から自分の子供を初めて抱かされた時，疑いはすべて消え去りました。私たちはその子にビルと名付けました。とてもかわいい子供で，目に入れても痛くないという言葉の意味がよく分かりました。ビルは私の生活のすべてになりました。一部ではなく，すべてでした。私はビルのためにだけ生きま

した。私にはベンがいましたが，今にして思えば，ビルが誕生する以前に体験した様様な出来事によって，私の心の中には何か漠然とした無常観のようなものができ上がっていたのです。(もっとも，それは何の根拠もないものでした) しかし，ビルに対する確信は絶対的でした。ビルは私が生んだ子供だったからです。

暮らし向きも次第に良くなり，トレーラー式の移動住宅を買えるまでになりました。ある時私たちは幸運にも，一軒の末日聖徒の家に隣合わせた所へ移り住みました。彼らはとても親切で，一緒に教会へ行こうと何度も誘われました。私は，子供には神のことを知って欲しいと考えていたので，彼らが，私たちが色よい返事をするまで誘い続けてくれたことを嬉しく思いました。

私たちが最初に出席した集会は，断食証会でした。私はその初めての体験に少し戸惑いましたが，ベンはそうではありませんでした。ベンはすぐに心を動かされました。続く2週間で私たちは宣教師から2回レッスンを受けました。そして，1970年2月28日，さらに3度のレッスンを受けて，面接を受け，その日の夜にバプテスマを受けました。

それから6日経った3月6日，ビルの体に異常が起きました。昏睡(こんすい)状態になり，病院へ運ばれましたが，医者にも手の施しようがありませんでした。ビルは死にかけていました。

あの恐ろしい日のことは一生忘れることができません。その前日はとてもうららかな日でした。太陽は心地よい光を注ぎ，すべてが自分たちのためにあるように思えました。私たちにはすべてのものがありました。安らぎ，健康，愛，そして教会。それらは私の子供時代にはなかったものばかりでした。ビルがちょうど1年7カ月を迎えた頃で，その晩はビルの祖母のために誕生パーティーを開きました。ビルはとても楽しそうで，ひとりではしゃぎまわっていました。ところがその翌朝早く，私はビルのおかしな泣き声に目を覚まされました。ビルを寝かせておいた部屋に行くと，火が付いたように泣いていました。皮膚が黒ずんでいました。そして口から泡を吹いていました。体に触るととても熱く，毛布にくるんでから抱き上げたほどでした。

私たちは病院へ駆け込みました。医者は診察を行ない，何とかビルを助けようとしていましたが，私たちにできるのは，ただ待つことだけでした。そうしている内に医者が来て，私たちはビルの体温が42度以上もあること，そして，その原因がまったくつかめないことを伝えられました。その医者は州で一番優れているという小児科医を呼びました。しかし，その医者にもまったく原因が分かりませんでした。その朝もだいぶ過ぎた頃，彼は私たちを呼び，手の施しようがないことと，熱が一向に下がる気配がないことを話しました。そのままいけば，ビルは死ぬしかありませんでした。それからの2時間にどのようなことがあったのか，はっきりと思い出すことはできませんが，子供の頃のあの寂しい気持ちがよみがえってきたことは今でも覚えています。

ベンはだれかに呼び出されて話をしていました。私はまったくひとりきりの状態でした。それで，友人に電話をかけ，ビルの命がもう2，3時間しかないことを告げました。受話器を置いてから，私はビルが置かれていた部屋へ行きました。とても小さく，かわいいビルでしたが，少しも体を動

かしませんでした。

私は感覚をまったく失ったような状態で，ビルのベッドの横に座りました。そうしている内に，何とも表現しようもない安らかな感情が心の中に湧いてきました。私がほかにそのような素晴らしい気持ちを味わったのは，主の神殿で永遠の結び固めを受けた時だけです。それはとても力強いもので，私は茫然として体が震えるような気がしました。それから前を向くと，ドアの所にひとりの人が立っているのが見えました。それは私たちのワード部のある大祭司の兄弟でした。私は彼の名前は知りませんでしたが，彼がなぜそこにいるのか分かりました。

私はベッドからビルを抱き上げました。私が体に触れるとビルは目を覚まし，一瞬私の顔を見て，笑みを浮かべました。

戸口にいた兄弟がこう言いました。「私はウォルターズ兄弟です。その子に灌油(かんゆ)の儀式を施すようにと主から命じられて来ました。」ビルは隔離されていたので，看護婦が一度にひとりの人しか入室させなかったのです。それでウォルターズ兄弟は同僚を廊下に残し，ひとりで来ざるを得なかったのです。彼はビルの頭に油を注いでから，祝福の言葉を述べました。それは，ビルの健康と力がよみがえり，その日の内に元の体になるという祝福でした。

それから間もなく，医者がやって来て1枚の紙に私のサインを求めました。それはビルの死亡を確認する書類でした。私がそれを拒むと，彼はまた後で来るからと言って部屋を出て行きました。それから10分後，頭を上げた私の目に映ったのは，ベッドの上に座っているビルの姿でした。完全に良くなっていました。ビルは病気のことなど何もなかったような顔をして，ベッドをはい下り，精一杯足を動かしながら，いつもとまったく変わらない早さで，廊下へ出て行きました。そして医者の所へ行き，その足にまとわりつきました。いつもは冷静なその医者も，唖然(あぜん)としてビルを見ていました。それから，ビルを抱き上げると，大声で涙と笑いで顔をくしゃくしゃにしながら，廊下を私の方へ向かって走って来ました。彼は私にこう言いました。「奇跡ですよ。」

私もそれにうなずきました。

ウォルターズ兄弟にビルに灌油の儀式をするよう言ったのがだれかは今も分かりませんが，確かなことがひとつあります。彼は神から遣わされたのです。

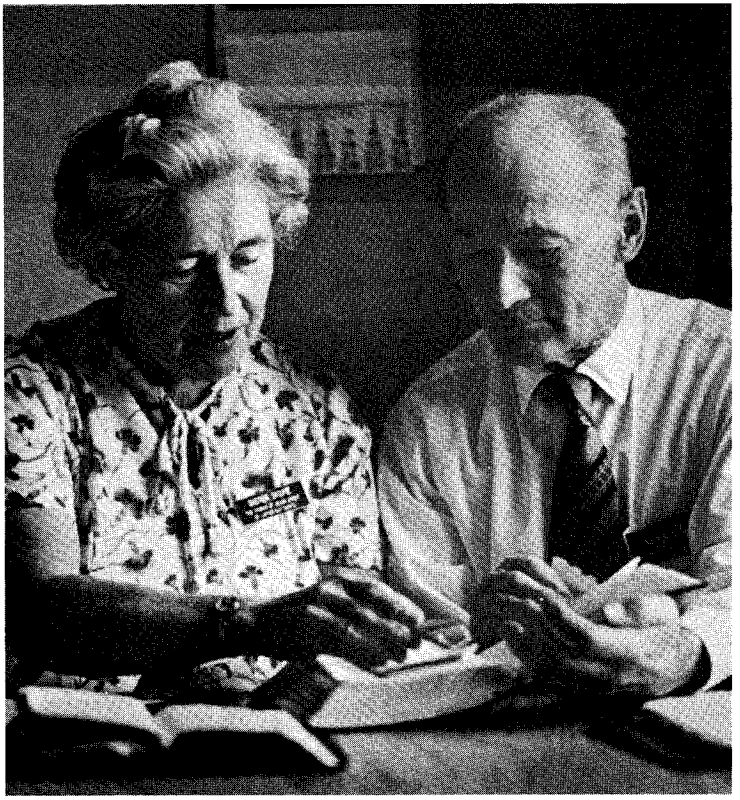
私たち夫婦の伝道

サミュエル・R・ホーキンス

私たちのような老人に，伝道などとは思いも寄らないことでした。夫と私はとうに第一線を退いた生活をしていました。大会の席上，スペンサー・W・キンボール大管長から年配の夫婦も伝道に出るべきだとの言葉があった時は，大管長が何か私たち夫婦に目を向けているように感じられてなりませんでした。(『より高い地点に向かって前進しよう』「聖徒の道」1979年10月号，pp. 116－20参照)

私たちにとって，その決心をするのは決して簡単なことではありませんでした。ところが，話は結局そういうことになり，気がついた時には，監督やステーキ部長との面接というところまできていました。まだ伝道地へ行かない内から，私たち夫婦はいろいろな祝福と驚きを経験しました。

別に借家の広告を出したわけでもないのに，突然ひと組の夫婦が玄関口に現われ，大きな家を捜しているのですがと言ってきました。話を聞くと，その人たちは不動産屋へ電話をするつもりが，なぜか違う番号の所へかけてしまったのだそうです。ところが，その間違い電話の相手が，自分は貸家は扱っていないが，近く伝道に出る夫婦がいるから，そこなら貸してもらえるかも



知れないと言い，私たちの住所を教えてくれたというのです。

伝道地がワシントン・シアトル伝道部に決まったと知らされた時，私たちはとても喜びました。そこは，かつて私たちの長男が伝道した所だったのです。ですから，よく知っている場所へ行くような気がしました。

それから何カ月か経って，私たちは監督長老の面接を受け，その中で，伝道地へ来てからどのように証が強まってきたかを聞かれました。私はみたまの顕(あらわ)れの強さに驚いていると答えました。確かにそれまでにも，教会の責任や毎日の仕事を果たしていく中で，導き，霊感，個人的な啓示などを受けていました。しかし求道者を前にして，この福音が真実であることを証した時に感じた力は，何と説明していいのか分からないほど素晴らしいものでした。私たちは，長い間荒くれ男に混じって仕事をしていた人や，よほどのことがない限り満足にお祈りなどしたことがないといった人々が，ひざまずいて，恵み深い天父に自分の心を打ち明ける姿を見ました。そして，その人たちは自分の生活を変えていったのです。

私たちは種を蒔くことはしましたが，刈り入れについてはすべて主にお任せしました。この教会の会員を奥さんに持つ，ある若い男性がいました。彼もレッスンを受けることになりました。最初のレッスンはとても喜んで受けてくれました。ところが，2度目の約束の前に，突然彼はこの世の執着心にとらわれ，私たちに二度と来ないで欲しいと言ってきたのです。

私たちは祈りました。そして，すぐにではないが，また彼を訪ねなければならないと強く感じました。その後も，主の導きを求め続けました。そして3週間後，私たちは次の水曜日に彼を訪問すべきだというみたまの確認を感じました。それから，その日のいつ頃訪問したらよいかを尋ねて祈り，再びみたまの力を感じました。水曜日の朝が適切でないということは分かりました。それで午後に，私たちはもう一度祈りました。すると，「今」と心に強く迫る答えが返ってきました。

私たち夫婦は急いでアパートを出ました。でも私は途中ある店に立ち寄り，フィルムの現像を頼みました。フィルムをカウンターに置いている時に，何かに追い立てられるような気持ちを覚えました。心の中に「今」という言葉が何度も響き，みたまが私を怒っているかのように感じました。私は追い立てられるようにしてその店を出，自動車に乗り込みました。3分後，私たちは彼の家に着きました。彼はその時モルモン経を読みながら，私たちのことを考えていたそうです。話し合っていくにつれ，彼はまたレッスンを受けたいという気持ちになりました。

素晴らしい長老や姉妹たちに巡り会えたのも大きな喜びでした。ある宣教師の言葉を聞いてとても感動したことがあります。彼は別の所へ転任することになっていました。その彼がこう言ったのです。「私は赴任先の支部に夫婦で伝道していらっしゃる方がいるか調べてみたんですが，いないとのことでした。とても残念です。」彼は本当にがっかりした様子でした。

キンボール大管長のメッセージと，それが私たちに与えてくれた影響力に感謝しています。皆さんは夫婦で伝道に出るってどんなことだと思いますか。それはうれしい驚きに満ちた素晴らしい時間です。

それは「西部」から

フィリップ・ベイナルース

宣教師たちのいる教会へ向かう道筋の最後の角を曲がった時，前に進むのを防げようとする強い力を感じました。

私はフランスのノルマンディーのある小さな港町で子供時代を過ごしましたが，その頃に，アメリカの植民について書いた「西部」という本を読んだことを覚えています。その本には，手押し車に荷を載せて平原を横断したモルモンの開拓者たちの信仰と勇気が描かれていました。私は波止場で魚を一杯積んだ手押し車を動かしている人たちを見たことはありましたが，1台の木製の車を4，5人がかりで動かしているような場合もありました。そして，その本を読んで以来，私はモルモンの開拓者たちを尊敬していました。

しかし，モルモンの若いふたりの宣教師が我が家に来るなどということは，想像もしていませんでした。それは，我が家が南フランスへ移った後，私が高校在学中のことでした。そのモルモンの宣教師たちは，どこから見ても開拓者には見えませんでした。髪は短く切り，ひげもきれいにそっていました。その上，スーツとネクタイといういでたちです。宣教師たちは私に，彼らの集会場に来て，英語のクラスに出てみないかと誘いかけてきました。私は両親の許可をもらい，出席することにしました。

間もなく，私はその宣教師たちも，肉体的な力だけでなく，霊的な力においても優れた人々であるということを知らされました。宣教師たちはよく我が家を訪れてきました。私の両親は初めから社交的な付き合いと割り切って考えていましたが，私は彼らの教会のことをいろいろ質問し，その答えに熱心に耳を傾けました。

私の母はカトリック教徒で，父はユダヤ教徒でした。ふたりはいつも私に，正しい生活をし，祈り，神を信じるように言っていました。しかし，私にはその宣教師たちは神を知っているのではないかとさえ思えました。私は両親と話し合っている彼らの言葉を聞いて，少しずつ知識を蓄え，時とともに理解を深めていきました。友人のだれかが宣教師をばかにしたり，教会をけなしたりした時は，むきになってかばいました。当時の私が，完全な理解を得ていたとは思いませんが，宣教師たちは真理を語っているのだという確信はありました。

私の高校時代，何組もの宣教師が入れ替わり立ち替わりやってきました。両親はいつも愛想よく迎えていましたが，教会には関心を示しませんでした。かといって，自分から彼らの話し合いに加わるには，私はまだ若過ぎました。そして，様々な教会の教えの中をさまよいました。私たちはやがて，ニースからカンヌへ引っ越し，宣教師たちとの接触も途絶えました。

当時私は内面的に非常に苦しい時期にいましたが，しばらくして，再び主を祈り求めるようになっていました。そして，すべ

てを主にゆだねなければならないということを理解しました。私は心に熱いものを感じ，自分を知り，愛し，見守って下さる永遠の御父の存在を強く確信したのです。それから間もなく，私は郵便局へ手紙を出しに行った時に，ふたりの宣教師を見つけました。私は彼らに駆け寄りました。私は「あなた方は宣教師じゃありませんか」と大声で言い，天父に対して持っていた素晴らしい気持ちを語りました。彼らはすべてを理解し，ひとりの宣教師はこう言いました。「それは聖霊があなたに真理を話したのです。」

その言葉は私を感動させました。それまでにも自分の体験や，頭の中で考えていたこと，霊的な証を話したことはありましたが，理解してくれた人はいませんでした。しかし，その宣教師たちは，私の話の一つ一つを，よく理解してくれたのです。私たちは長い時間話し合いました。

私は間もなく兵役に就くことになっていましたが，宣教師や会員たちの側にいたいという気持ちが日増しに強くなっていきました。福音の新しい原則を学ぶ度に，それを生活の中に取り入れていきました。兵役に就く直前に，ひとりの長老からこう言われました。「あなたの生活はモルモン的ですね。でもあなたはバプテスマを受けないで，完全な人間になろうとしています。それは間違いですよ。あなたが完全になれるように助けるのが教会なんです。」宣教師たちは，私には証があると言ってくれましたが，私は自信が持てませんでした。

軍隊生活の中では，時間に恵まれ，私は教会に対する自分の気持ちについて深く考えました。私が配置されていた所はブリアンソンで，近くに教会の支部はありませんでした。しかし私は，それまでに学んでいたことを心に留め，信仰の種を養い育てていました。

除隊になった時，大きな決断を迫られました。私は以前から，ノルマンディー出身の親友とアメリカ旅行を計画し，その費用の準備も終えていました。ところが，彼の方の準備が整っていなかったのです。自分ひとりででも行くかどうか決めなければなりませんでした。私はノルマンディーへ帰り，浜辺を歩きながら考えました。

その時，だれか私の心の中のつぶやきを聞くことのできた人がいたら，私がその時すでに心の中に証を育んでいたことが分かったことでしょう。「ここでの生活は素晴らしい。家族も友人もいる。自分に対する自信もある。それに，こんな美しい所はほかにない。でも，もし行かなかったらどうなるだろう。福音を学び，本当に証を得る機会を無くしてしまうかも知れない。昔からの夢だったこの旅行をあきらめることはできても，主の教会をもっとよく知るチャンスを捨ててしまっていいのだろうか。」

アメリカで私は多くの教会員と親しくなる機会に恵まれました。やがて私は，自分には証があると思えるようになりました。心の中で考える度に，聖霊の光が注がれ，疑いが晴れていくのを感じたあの素晴らしい気持ちは忘れることができません。私は

なぜ一夫多妻が行なわれたのか理解できないでいましたが，コロラドとユタの間をバスで走っている時に，一夫多妻を行なった人々を啓示の中で見ました。それは視覚的なものではなく，霊的な洞察というべきものでした。そして，なぜ多妻結婚が清いこととされたのかを理解し，それが神から与えられたものであることを悟りました。このような疑問の解明が，アメリカを旅する間に次から次とありました。

私は最後にワシントン州のシアトルに近い島々を幾つか訪れ，小さなアパートで，10日間にわたってモルモン経を勉強しました。そして証は大きくなりました。フランスへ帰る時が来た時，私は心の中で，自分はバプテスマを受けるだろうと思いました。

フランスへ帰って数日後，宣教師からある人のレッスンを手伝って欲しいと頼まれました。その求道者は科学を勉強している学生で，以前私が頭を悩ませたとまったく同じ疑問を幾つか抱えていました。私はどのようにしてそれらの答えを得たかを説明しました。レッスンを終えて別れる時，彼は納得した様子で，うれしそうな顔をしていました。

2，3日して，宣教師から電話があり，彼がバプテスマを受けることになったと聞かされました。その時私は自分に問い掛けました。「お前はこのことをどう思うんだ。人がバプテスマを受ける手伝いはしても，自分は前と同じままだ。こんな状態はもうこれで十分じゃないのか。」私は証は持っていると思っていました。でも断食し，祈りました。その夜は一睡もせずに，この証に対する確認を下さいと，主に祈り求めました。そして翌朝早く，ついに，安らかな心地よい気持ちで一杯に満たされたのです。長老たちにバプテスマの準備ができたと告げるべき時が来たのでした。

宣教師たちのいる教会へ向かう道筋の最後の角を曲がった時，前に進むのを妨げようとする強い力を感じました。それは，風速100キロの風に向かって歩いているような感じでした。前にそのような強い風を経験したことはありましたが，それよりも強いものでした。それはただの風ではなく，霊の力でした。私はもう少しで，前進するのをやめ，戻ろうとするところでした。その力は私にすべてのことを疑わせようとしていました。しかし私は最後にこう言いました。「いや，そんなことはない。私は神がおられることを知っている。」心の奥深くにその真理を強く感じました。私には，主が自分のために戦って下さるという確信がありました。

着いた教会はごく普通の建物でしたが，私はドアを開けるのに，自分の力をすべて振り絞らなければなりませんでした。中へ入ると幾人か会員がいて，私は彼らが発するスピリットを感じました。そして，あの敵対する力は打ち砕かれて，消え去ったのです。私は再びあの安らかな気持ちを感じました。そしてそれから数日経ち，バプテスマと確認の儀式を受けた時は，さらに強くそれを感じました。

熊の足跡

七十人第一定員会会長会
ディーン・L・ラーセン

私はユタの北の方にある，ハイラムという小さな町で育ちました。ハイラムという町の名は，予言者ジョセフ・スミスの兄，ハイラム・スミスにちなんでつけたものでした。当時の人口は1500人くらいでした。辺ぴな所ということもあって，我が家には牛や馬を入れる家畜小屋，牧草地，広い庭などを初め，ほかにもいなかの生活に欠かせないものがそろっていて，家族の食料はほとんど自給できました。学校の教師をしていた父のわずかな給料で生活していかなければならなかった9人家族の我が家は，それで随分家計を助けられました。私たちはやりくりをしながら，何とか毎日の生活をしていました。

我が家の貯蔵食の中には，秋も深まる10月の頃には父や兄たちがとってきた鹿の肉が入っているのが普通でした。我が家にとって鹿狩りは，貯蔵用の肉が手に入るというだけでなく，胸躍る楽しい機会でもあり，とても大切なものでした。時には女の子まで入れて，大人も子供も一緒になって山へ行き，何日かキャンプをしたものです。年に一度のとても楽しい経験でした。今では私も年をとって，鹿狩りへの熱い気持ちもさめていますが，それでも，落ちたばかりの木の葉の臭いや，すがすがしい空気の中で，家族や親しい人々と山の中で過ごしたあの頃のことは，最も素晴らしい思い出としてよみがえってきます。私たちにとって，それは本当に大切な時間でした。

私は結婚し，ワイオミング州のビッグホーン・ベースンで教職生活を始めてからも，毎年秋には山へ鹿狩りに行きました。育ち盛りの子供を抱えていましたので，冬の間の貯蔵用として，鹿の肉はとても助けになりました。ワイオミングの山岳地帯は，私が少年時代を送ったユタのそれと比べると，まだまだ未開で，広大でした。私もそうでしたが，大自然の中で動き回るのが好きな人にとって，ワイオミングの山々は本当に素晴らしい所でした。

私はこのワイオミングで，ある年の猟の季節に，ひとつの経験をしました。その経験の中で私は大きな教訓を得，今に至るまでそれを忘れたことがありません。その年の気候は例年とは大分違い，普通なら9月末には山々の峰を白く染める初雪が，なかなか降ってきませんでした。猟の季節が始まる10月半ばまで暖かい日が続きました。それで，鹿たちが山の高い所へとどまったままで，まったくハンターたちの前に姿を見せませんでした。

それでもようやく，その季節の終わりには雪が降り始めました。鹿狩りの最後のチャンスと，私はある友人とモンタナとワイオミングの境に近いビッグホーン山脈へ一緒に行く計画を立てました。リトルビッグホーン川の水源地帯がある海抜2800メートルのあたりまでは，その友人の自動車で進みました。新雪が50センチくらい積もっていました。私たちは東の方の屋根の上に朝日が見え出した頃に狩りを始めました。私と友人とは違ったルートを取ることにし，かなり離れた山のある地点を，後で落ち合う場所に決めておきました。

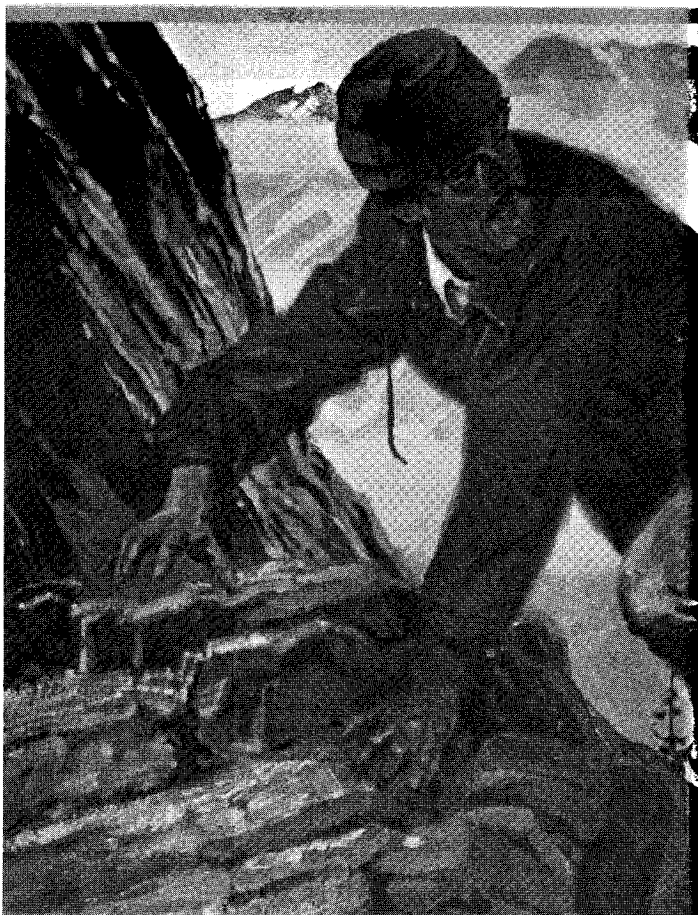
私は自動車を置いた所の近くを流れる川を渡り，反対側の斜面の木立ちの中に入っていった時，新雪の中に何かの新しい足跡を見つけました。それは熊の足跡でした。

●熊の足跡

しかもかなり大きな足跡で私は驚きました。ワイオミングの山岳地帯に熊は珍しくはありません。非常に数が多く，撃っても法に違反することはありませんでした。しかし，ビッグホーン山脈に熊が出ることはあまりなく，私はその新しい足跡との突然の遭遇に，何やら食指を刺激されるのを感じました。私はそれまでに熊を撃ったことはありませんでしたし，撃とうと思ったこともありませんでした。熊の肉はとても口に合う代物ではなかったと思います。

さらに100メートル近く進むと，踏み散らされた雪の中に血の跡と鹿の毛が見えました。その朝その場所で，熊が鹿を殺したことは明らかでした。熊がやぶの中を通って，鹿の死骸を松林の中で引きずった跡があり，後をつけるのは楽でした。松林に入ると，その鹿が見えました。頭と角が倒れた木の枝に引っかかっていました。熊はそれをはずそうとはせずに，その場所を立ち去っていました。おそらく，私が近づいてくるのを察知してのことだったと思います。

私はさらに熊の後を追い，険しい斜面になっている所を登りました。背の低い木が密接していて，進むのが大変でした。銃をつり皮で肩に下げ，はいつくばるような格



熊を銃で撃ち，傷を負わせたハンターの話を読んだことがあります。ところがその巨大な動物は怒り狂ってハンターに襲いかかり，彼に深手を負わせました。結局，そのために両足を切断しなければならなくなったのです。

好で進みましたが，数メートル登る度にひと息入れては，休みを取りました。

そうしてひと息入れている時に，周囲を見回して，自分の置かれている状況を判断してみると，やぶが茂っていて，10メートル以上離れた獲物を確実に仕留めるのはどうも無理でした。私は，もし熊と出くわしたら，果たしてどちらが有利だろうかと考え始めました。

そんなことを考えている時に，私は何かぞくりとするものを強烈に感じました。鳥肌が立ち，首筋のあたりを悪寒が走りました。そして，自分が極めて危険な状態にあり，急いでそこを離れなければならないという気持ちを感じました。それはとても強烈で，私は思わず立ち上がりました。その斜面をもっと開けた所まで下りると，これで何とか身の安全が保てるなと，ほっと胸をなでおろしました。それからはもう，熊を追いかけようなどという気持ちはまったくなくなり，最初の目的だった鹿狩りに精を出しました。

私はその時の体験をこれまで何年間も考え続けてきました。冒険的なことを追い求めようと思ったこともよくあります。その先に何かとても楽しいことが待っているよ

うに思えたのです。しかし，自分の身と霊に危険が及ぶ恐れのある場合は，必ずワイオミングのあの山の時と同じ感じや警告を受けてきました。それらすべてが，あのリトルビッグホーンの斜面で経験した時ほどに強烈だったわけではありませんが，非常にはっきりとしていて，とても無視することはできませんでした。比喩的な言い方をすると，「熊の足跡」を見つけた時は，必ず，心にしみ通るような警告のサインがないかどうかチェックするのが賢明です。そのサインによって多くの苦しみや障害から逃れることができるのです。

これから成長し，世の中へ出ていく若人は，数多くの「熊の足跡」に出会い，俗的な刺激や快楽のやぶの中へ誘われることがあるでしょう。誘惑は実に様々な形を取って現われます。最初はそう有害に見えないものもあります。また，ありとあらゆる場で誘いをかけてきます。家庭という神聖な場所ですら例外ではありません。新聞，雑誌，小説の中に現われることもあります。さし絵や写真などを用いた写実的な形をとるものもあります。あるものは音楽を通して私たちの思考や感覚の中に入り込んできます。またほかにも，テレビや映画などあらゆる最新の電子技術を駆使して迫るものもあります。私たちは時々，人との交わりの中で不注意に，不道徳な行ないへと通じている「熊の足跡」を追うことがあります。「熊の足跡」を追って，薬剤乱用という悪夢のような世界へ入り込んでいる人がたくさんいます。

何年か前のこと，大きな獲物を狙って，友人と連れだってモンタナ州の森林地帯へ入っていった人の物語を読んだことがあります。ふたりはかなり接近した位置で一頭の灰色熊に出くわしました。ひとりが銃を撃ち，熊に傷を負わせました。その巨大な動物は怒り狂ってふたりに向かってきました。すると，恐怖心に駆られたひとりは死にもの狂いで，近くに生えていた一本の小さな木の下の方の枝に登りました。でもその木は彼の体重を支え，熊の恐ろしい爪と牙から守れるほどには，太くも高くもありませんでした。もうひとりが熊を撃ち殺す前に，彼は深手を負わされ，結局，両足を切断しなければならなくなってしまいました。

先に私が比喩的に述べた「熊の足跡」を追いかけている人は，その先には必ず危険が待ちうけていることを覚えておかなければなりません。それらの中には，霊性や信仰の破滅をもたらすものもあります。また真の幸福，自尊心に深手を追わせるものもあります。それから立ち直るのは容易なことではありません。私は「熊の足跡」の向こうにある危険を避けるには，その跡を追わないようにするのが一番ということを学びました。聖霊のささやきを通して与えられる警告のサインに従い，身の安全をはかり，天父が柔順な人に約束されたみ守りの力を得ることができる危険のない所まで逃げて下さい。

そうするなら，「熊の足跡」を追いかけて得られるどんなスリルや興奮よりも大切な，心の平安を得ることができます。また私たちは，神のあらゆる祝福を受ける資格があるという確信をもって，永遠の幸福への道を歩み続けることができます。私たちを傷つけ，行く手をはばもうとする諸々の力から身を守るには，その神の祝福が必要なのです。

十二使徒定員会会員
ボイド・K・パッカー

主のともしび

霊的な事柄の学び方は読む，聞く，考えるなど共通する部分もありますが，普通一般の学習方法とは異なります。霊的な事柄を教え，学ぶには特別な心構えが必要です。すでに知っている人もいれば，まだこれからという人もいるかも知れませんが，言葉だけでは説明しきれない事柄があります。しかし，それは，それなりの意味があってのことと，私は確信しています。

塩はどのような味がするか

私がまだ教会幹部に召される前に体験した出来事を紹介したいと思います。それは私自身に大きな影響を与えました。飛行機に乗っていた時のことです。私は無神論者を自認する男性と隣合わせた席に座りました。その人が神を信じていないということを執拗(しつよう)に言い張るので，私は証しました。「あなたは間違っています。神は実在しているのです。私は神がおられることを知っ

ています。」

彼は反論してきました。「そんなこと分かるはずないでしょう。一体全体だれに分かるというんですか。分かるはずがありませんよ。」私がどうしても折れないと見てとると，弁護士だというその無神論者は，証というテ―マに関して決定的な意味を持つと思われる質問をしてきました。彼は人を見下すような態度でこう言いました。「まあいいでしょう。それでは，あなたは知っていると言うが，一体どういうふうに知っているのか説明してもらいましょうか。」

私は学位も取得していましたが，いざ説明しようとすると，何と表現してよいのか途方に暮れてしまいました。

冷笑家，懐疑論者の質問すべてに答えることができずにさげすまれ，当惑する宣教師がいます。そのような嘲(あざけ)りを受け，うつむいて恥じ入る人もいます。(鉄の棒，大きな建物，人々の嘲りを思い起こして下さい。〔Ⅰニーファイ8：28〕)

私が「みたま」「証」などの言葉を使うと，その無神論者は「何を言っているのかさっぱり分かりません」と答えてきました。「祈り」「識別の賜」「信仰」などの言葉も彼には何の価値のないものでした。彼がこう言いました。「いいですか。あなたは本当は分かっていないんですよ。もし分かっているなら説明できるはずじゃないですか。」

私は彼に対する証がまずかったのではと思い，どうしたらよいのか当惑してしまいました。その時です。何かが私の心の中に注がれました。ここで予言者ジョセフ・スミスの言葉を引用したいと思います。「人は啓示のみたまの最初のささやきを自覚しただけで祝福を受ける。例えば聖い知識が心に流れ込むのを感じた時，あなた方の心にはいろいろな考えが閃光のように次から次へと浮かんでくるだろう。そしてそれがその日のうちに，あるいは間もなく実現するのである。すなわち神のみたまによりあなた方の心に示された事柄はその通りになる。そして神のみたまがどのようなものかを知り，理解する時，あなた方は啓示の原則を自分のものとして進歩し，やがてイエス・キリストにあって完全な者となるであろう。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*, p. 151)

そのような考えが頭にひらめき，私は彼に言いました。「それでは私にも質問させて下さい。あなたは塩がどのような味かを知っていますか。」

「当たり前ですよ。」

「一番最後に塩を口にしたのはいつですか。」

「さっき機内食で味わったばかりです。」

「それなら，塩の味がどんなものか本当に知っているのですね。」

「塩の味だけじゃない，何でも知っていますよ。」

「あなたに塩と砂糖を一杯ずつ与えて，両方をなめてもらうとします。塩と砂糖の味の違いを説明できますか。」

「随分子供じみたことを言いますね。当たり前でしょう。塩の味くらい分かりますよ。塩をなめたことがない人なんてどこにいるんですか。常識ですよ。」

「それでは，私が一度も塩をなめたことがないと仮定して，それがどんな味か説明して下さい。」

彼はちょっと考えた後で，口ごもりながらこう言いました。「甘くもない，すっぱくもない。」

「それではどういう味でないかを言っているだけで，どういう味なのかの説明にはなっていませんよ。」

何回か口で説明しようとしましたが，できるはずがありませんでした。塩の味というようなごく当たり前のことなのに，彼は言葉だけでは説明できなかったのです。私はもう一度彼に証し，こう言いました。「私は神がおられることを知っています。あなたはこの証を嘲り，もし分かっているなら，どう分かっているのかちゃんと口で言えるはずだと言いました。霊的なたとえ方をすると，私は塩の味を知っています。私はこの知識がどのようにして与えられたかを言葉では説明できませんでしたが，それはあなたが塩の味を説明できないのと同じことです。しかし，もう一度申し上げておきますが，神は実在の御方です。生きておられるのです。自分が知らないからという理由だけで，私まで知らないなどと言わないで下さい。私は知っているのですから。」

別れ際に彼はつぶやくように言いました。「私はあなたが信じているような宗教に頼らなくてもやっていけます。そんなものは必要ありませんよ。」

それ以後，私は自分が知っている霊的な事柄を言葉だけで説明できない場合でも，まごついたり，恥じ入ったりしたことは一度もありません。使徒パウロはそのことを次のように言っています。

「この賜物について語るにも，わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで，御霊の教える言葉を用い，霊によって霊のことを解釈するのである。

生れながらの人は，神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また，御霊によって判断されるべきであるから，彼はそれを理解することができない。」（Ｉコリント２：13－14）

言葉だけに頼らないで

霊的な知識を言葉だけで説明することはできません。しかし，みたまを受けるにはどう備えたらいいかということは，言葉でも説明できます。みたまは私たちに助けを与えてくれます。「それは，人が聖霊の力で語るときには，聖霊がその話を人の心の中に浸みこませるからである。」（IIニーファイ33：１）

ひと度霊的な理解を得ると，私たちは，これがそうだと自分自身に言うことができます。これが聖典の中で言われていることなのです。したがって，よく選んで用いるならば，言葉で霊的な事柄を教えることもできないことではありません。

みたまを完全に説明する言葉は，私たちには与えられていません。（それは聖典の中にさえありません）聖典ではよく「声」という言葉が用いられていますが，それで十分に説明し尽くされているわけではありません。この繊細微妙な霊的な交わりは肉の目や耳で，見たり聞いたりできるものではありません。声という表現がされていますが，それは耳で聞くというよりも，心で感ずる声なのです。

このことを理解してから，モルモン経のある節が私にとっては深い意味を持つもの

となりました。そしてモルモン経に対する証が信じられないほど強くなりました。それはニーファイに背いた，レーマン，レミュエルに関連した聖句です。ニーファイは彼らを叱責し，こう言いました。「あなたたちは，これまでに一人の天使を見，天使はまたあなたたちに言葉をかけた。まことにあなたたちはその御声を時々聞いている。その時それは静な細い声で話したもうが，あなたたちはなんらの感じもなかったのでその御声を感ずることができなかった。」（Ⅰニーファイ17：45）

天使の声

ニーファイは深い意味を持つ素晴らしい説教の中で，次のように教え，説明しています。「天使は聖霊の能力で語るから，キリストの言葉を宣べ伝える。それであるから，私はキリストの言葉をよく味わえとあなたたちに勧めた。それはキリストの言葉は，あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。」（Ⅱニーファイ32：3）

もし天使が私たちの前に現われ，言葉をかけてきたとしても，視覚や聴覚に頼るだけでは，交わりを持つことはできません。なぜなら，予言者ジョセフ・スミスが言っているように，霊的なプロセスというものがあるからです。それを通して聖い知識が私たちの心に流れ込み，骨の折れる勉強や時の経過を待たなくても，知っておくべき事柄を知ることができるのです。なぜなら，それが啓示というものだからなのです。

予言者はまた次のように言っています。

「神がその無限の知恵に照らして，私たちが肉体を受けて，この地上にいる間に私たちに示すことが妥当であると思われるものは，すべて抽象的に，私たち人間の有する肉体とは関わりなく知らされる。すなわち，まるで肉体を持たぬかの如く，直接霊に啓示が与えられる。そしてこの私たちの霊を救う啓示は，肉体にも救いを得るのである。」（*Teachings*, p. 355）

静かな細い声

聖典には，みたまの声は「荒々しく」も「高く」もなく，また，「雷の音でもなくまた大きな騒がしい音でも」ないと書かれています。むしろそれは「やさしくささやくような静な細い声」で「人々の心の底まで貫」き，「心が燃えるような感じを与え」るものです。（Ⅲニーファイ11：3；ヒラマン5：30；教義と聖約85：6－7）エリヤが，主の声は風の中にも，地震の中にも，火の中にもなく，「静かな細い声」（列王上19：12）であると認めた時のことを思い起こして下さい。

みたまは，叫んだり，大きな手で揺すったりはしません。ささやきかけてくるのです。そのささやき方は，非常に静かで，ほかのことに気を取られていると，まったく気が付きません。（知恵の言葉が私たちに啓示されたことには何の不思議もありません。酒浸りの人や麻薬に溺れている人がそのような声を感じることができるでしょうか）

時には強い訴え方をして，気付かせることもあります。しかし，ほとんどの場合，その静かなささやきに心を傾けていないと，みたまは離れ去り，私たちが自ら熱心に求め，聞く耳を持ち，自分自身の言葉で，昔

「あなたたちは，これまでに一人の天使を見，天使はまたあなたたちに言葉をかけた。……あなたたちはなんらの感じもなかったのでその御声を感ずることができなかった。」

のサムエルのように，「しもべは聞きます。〔主よ〕お話し下さい」(サムエル上３：10)と言うまで訪れなくなります。

霊的な体験は頻繁には与えられない

霊的に強い印象を残す出来事は，そう何度もあるわけではありません。多くの場合，霊的な体験は，私たちを教え導き，指示を与え，誤りを正すために与えられます。私たちは正当な権能を持つ人からそのような職に召されない限り，勧告を与えたり，誤りを正したりする立場にはありません。

霊的な体験を軽々しく話してはいけない

私はまた，特に霊的な体験を四六時中話すのは賢明なことではないと信じています。そういう体験は慎重に扱い，他の人々の祝福のために用いるようにと，みたま自身のささやきがあった時だけに話すべきものです。私の頭の中にはいつもアルマの言葉があります。

「神の奥義を知ることは多くの人に許されている。しかしその人々は神が世の人に下さるほかには，何の教えも伝えてはならないと言う神のきびしい命令を受けている。神がその教えを世の人に許したもうのは，世の人が神に仕える熱心と従順の度合による。」(アルマ12：９)

マリオン・Ｇ・ロムニー副管長が伝道部長とその夫人たちを前に，次のように話すのを聞いたことがあります。「私は自分が知っているすべてを話すようなことはしません。自分が知っているすべてを妻に話すようなことはしていません。それは，神聖な事柄を軽々しく口にするなら，主の信頼を失ってしまうということを知っているからです。」

ルカ伝によると，マリヤはイエスの誕生にまつわる神聖な出来事を心に留め，思いめぐらしていたことはありますが，それは私たちにも求められることです。(ルカ２：19参照)

霊的な事柄に無理強いはきかない

ほかにも学んでおくべき事柄があります。証は無理やりしつけられるものではなく，成長していくものです。私たちの証は，背丈が伸びていくようにして，育っていきます。それは少しずつ成長するため，ほとんど気が付きません。

自分の都合に合わせて，答えや祝福がすぐに与えられるように求めることは賢明ではありません。霊的な事柄に無理強いはききません。私たちにはみたまが与えられるという特権がありますが，強要する，強いる，無理強いする，強制するといった言葉をこの特権に当てはめることはできません。豆に無理に芽を出させたり，卵にひなにかえるように命じたりすることができないように，無理にみたまの答えを引き出すこともできません。私たちにできるのは成長を促す環境作りをし，育み，守ることであり，無理強いはできません。成長を待たなければならないのです。

偉大な霊的な知識を得ようとする場合，性急であってはなりません。育つままにし，その助けを与えるようにして下さい。無理にことを進めると，誤った方向に導かれることになります。

みたまは，叫んだり，大きな手で揺すったり
はしません。ささやきかけてくるのです。

あらゆる方法を用いる

私たちは現に持っている光と知識を用いて，人生に処するように求められています。義務の遂行を説く啓示を求めるべきではありません。なぜなら，それについては聖典の中で言われているからです。また，霊的な事柄でも世事に関する事柄でも，すでに与えられている知識に取って代わる啓示を求めるべきではありません。現に与えられている知識をおしひろげていきさえすればよいのです。私たちは人生を律する決まり，規則，規定に従って，生活を秩序ある，活動的なものにしなければなりません。規則，決まり，戒めは大切な防護手段です。自分の生活を変えるために，啓示による教えが必要だと思っても，本当にそれが必要になる時まで与えられることはありません。「務めて……従い」という勧告は，確かに賢明です。（教義と聖約58：27参照）

ナタナエルか，トマスか

霊性は人によって大きく異なります。「わたしたちは，……預言者たちがしるしていた人，ヨセフの子，ナザレのイエスにいま出会った」とピリポが言った時，ナタナエルはこう答えました。「ナザレから，なんのよいものが出ようか。」

しかし，ピリポに「きて見なさい」と言われたナタナエルは，それに従いました。ナタナエルは心の中に強烈に響くものを感じたに違いありません。彼はたちどころにこう叫んでいます。「先生，あなたは神の子です。」

主はその信仰のゆえに彼を祝福し，こう言われました。「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて，神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを，あなたがたは見るであろう。」（ヨハネ１：45－51）

トマスについて見てみましょう。トマスには10人の使徒の証をもってしても，主がよみがえられたと信じさせることができませんでした。トマスは目に見える証拠を求めました。「わたしは，その手に釘あとを見，わたしの指をその釘あとにさし入れ，また，わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ，決して信じない。」

その８日後，主が現われ，トマスにこう言われました。「あなたの指をここにつけて，わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで，信じる者になりなさい。」自分の目で見，手で触れた後，トマスは答えて言いました。「わが主よ，わが神よ。」

それから，主は意義深い教訓の言葉を与えられました。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は，さいわいである。」（ヨハネ20：25－29）

トマスは疑いました。主御自身から「その心には偽りがない」（ヨハネ１：47）と言われたナタナエルとはまったく逆でした。トマスは「見なければ信じない」という態度でしたが，ナタナエルは反対でした。初めに信じ，後に「天が開けて，神の御使た

ちが人の子の上に上り下りするのを」(ヨハネ1：51) 見たのです。

自分で考えているよりも力強く

すべてのことを理解していないからといって，気おくれしたり，恥ずかしいと思うことはありません。ニーファイはこう言っています。「私は神がその子供たちを愛したもうことは知っているがよろずのことの意味を知っているわけではない。」(Ⅰニーファイ11：17)

皆さんの証の中には，自分で思っているよりも，さらに大きな力があります。主がニーファイ人に語られた言葉を見てみましょう。

「およそ真にへりくだる心と悔いる精神とを抱きてわれに来る者は，われこの者にみな火と聖霊とを以てバプテスマを施さん。かかるバプテスマは，レーマン人改心をしたる時に，われに対して抱きし信仰に応じてわれがかれらに施したる火と聖霊によるバプテスマと同じ。その時レーマン人は，この火と聖霊によるバプテスマを受けたることを覚らざりき。」(Ⅲニーファイ9：20)

何年か前，私は遠い異国の地で伝道している息子に会ったことがあります。伝道に出て1年経った頃です。息子は初めにこう聞いてきました。「父さん，霊的に成長するにはどうしたらいいか教えて下さい。そうなれるように一生懸命やってきたけど，ちっとも変わらないんです。」

それが彼の自己評価でした。しかし，私の評価は違っていました。たった1年の間にこんなに成熟し，霊的に成長したのかと，信じられないほどでした。彼の場合成長が一つ一つの積み重ねで，びっくりするような霊的な体験として来なかったために，覚ることができなかったのです。

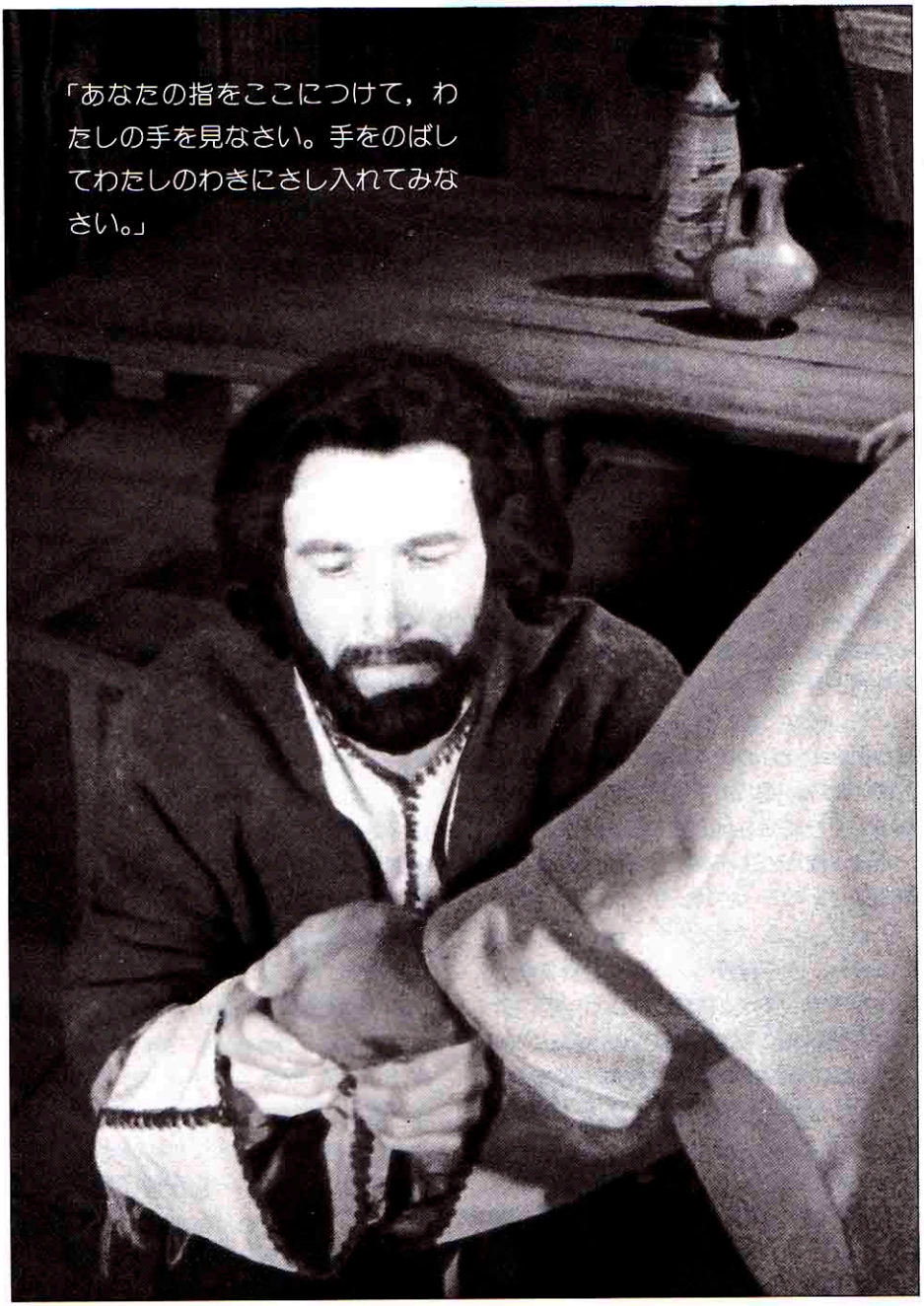
どこから始めるべきか

次のように言う宣教師は決して珍しくありません。「まだ証がないのに，どう証したらいいんですか。どうしたら，神が生きておられ，イエスはキリストであり，福音が真実であると証できるのですか。そのような証がないのに，証をするとしたら，不正直ということにならないでしょうか。」

ひとつの原則を述べたいと思います。証は実際に証をしていくなかで見いだすものなのです。霊に関わる知識を求めていく過程でいつか，信仰の急激な上昇を経験します。その大いなる飛躍をするには，主を信頼しなければなりません。聖典に言われているように，確かに，「人の魂は主のともしび」(箴言20：27) なのです。

本を読み，人の話を聞いて証を得ることにはそれなりの意義があります。それは最初の段階として必要なことです。しかしそれは，自分が証してきたことが真実であるというみたまの確認を受けることとはまったく別の事柄です。証は，人に分かち与える時に与えられるということを理解しているでしょうか。自分が持てるものを与えるなら，その代わりに，さらに多くのものを与えられるのです。

イテル書には次のように書かれています。「イテルは大きな驚嘆すべきことを民に予言したが，民は親しくこれを見なかったのでそれを信じなかった。さて私モロナイは少々言いたいことがある。私は，信仰とは


「あなたの指をここにつけて，わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。」

邪悪なところから来るささやきにだまされないよう，常に注意して下さい。偽りの霊感を受けることもあり得るのです。

まだ見ない物事を望むことであると世の人に教えたい。それであるから，あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないと証が得られないからである。」（イテル12：5－6）

証の中に信仰がはっきりと現われるのです。

主が支えて下さる

もし謙遜さと真心をもって証するなら，主は私たちをひとりにしてはおかれません。それは聖典に約束されていることです。次の聖句を見てみましょう。

「この故に，誠にわれ汝らに告ぐ。この民に向いて汝らの声を挙げ，而してわが汝らの心に与えんとする思想を語れ。さらば，汝ら人々の前にあわて惑うことなかるべし。

そは，汝らの言うべきことはその時その瞬間に与えらるべければなり。

されど，われ一つの誡命を汝らに与う。すなわち，汝ら何事にまれわが名によりて宣ぶる事は，すべてに於て厳粛なる心，柔和なる精神を以てこれを宣ぶるべし。

さらば，われこの事を約束す。すなわち，汝らこれを為さば，聖霊汝らに注がれて何事にまれ汝らの語るすべてのことを証せん。」（教義と聖約100：5－8）

懐疑論者は，自分に証があるかどうか分からないのに証をするのは自己欺瞞であり，そこから出て来る感情などは作為的なものだと言うことでしょう。確かに，これは懐疑論者たちには決して理解できないことです。それは，彼らがみたまを受けるために必要な信仰，謙遜，従順などの特質を顧みようとしないからです。

証が不誠実な人，また知識を誇る人，経験主義者，傲慢な人，不信心な人，尊大な人々から完全に隠され，守られている理由はそこにあるのです。皆さんはそのことを理解しているでしょうか。このような人々には，証は与えられません。

自分の望みを証することも，信仰による行ないであり，正しいことです。それは予言者アルマが人々に語ったことにも通じます。私たちは信仰から始めるのであり，最初から完全な知識を持っているわけではありません。アルマ書32章の説教は，福音を知って間もない人々，また新しい教会員，謙遜に求める人々に向けられたものであり，聖典の中でも特に素晴らしい箇所です。ここには，真理への証に対するひとつの鍵があります。

多くの場合，みたまとキリストの証は，これを人と分かち合う時に与えられ，保ち続けることができるのです。この過程の中に，福音の真髄があります。

これこそキリストへの信仰の完全な表現ではないでしょうか。証は自ら進んで分かち与えるのでなければ，思い出すことも，保ち続けることも，大きく育てることもできません。証を得るには，それを惜しみな

く与えなければならないのです。

みたまは離れ去ることもある

ひと度みたまを受けた後は，そのささやきに従って下さい。私も伝道部長をしていた時に，その大切さをいやというほど知らされた経験があります。当時私は教会幹部としての召しも受けていました。私は，伝道活動の前進のために，副伝道部長のひとりを解任するようにとのささやきを何回か受けていました。祈るだけでなく，自分の頭で考えてみても，それは正しいことでした。しかし私はそれをしませんでした。教会の中で長く奉仕してきたその人を傷つけはしまいかと恐れていたのです。

みたまが私から離れ去りました。もし彼を解任した場合にだれをその後任にするかを尋ね求めましたが，何のささやきもありませんでした。そのような状態が数週間続きました。私の祈りの声は部屋の中に閉じ込められて，天には届かないかのように思えました。私はほかにも数多くの代案を考えましたが，結局役には立ちませんでした。それで，私はようやくみたまの言葉に従ったのです。すると，途端にみたまの賜が戻ってきました。再び味わったその快さは素晴らしいものでした。聖霊の賜は皆さんにも与えられていますから，その素晴らしさはよく分かると思います。解任されたその兄弟も傷つくことなく，本当に大きな祝福を与えられました。そして間もなく，伝道の業も大きく進展したのです。

欺かれることもある

邪悪なところから来るささやきにだまされないよう，常に注意して下さい。偽りの霊感を受けることもあり得るのです。偽りの天使がいるように，偽りの霊も存在するのです。(モロナイ７：17参照)だまされないように注意して下さい。悪魔は光の天使に姿を変えて現われることもあるのです。

私たちの霊的な部分と感情的な部分とは密接な関係にあるため，感情の高まりを霊的なものと取り間違えてしまう可能性があります。受けた本人は神から与えられた霊的なささやきと考えているのに，実際は感情的なものであったり，悪魔からのものであったりということがよくあります。何か非常に霊的な経験をして，教会の正式に任命された神権指導者に異議を唱える権能を与えられたと主張する人々は，疫病に対するように注意し，避けて下さい。背教者のあてこすりや，主の教会に敵対する人々の異議にすべて答えることができないとしても，心を乱してはいけません。今私たちは，教会を攻撃しようとする数多くの敵に直面しています。時が来れば，悪(あ)しき人々を論駁(ろんぱく)し，誠実な人々を霊感によって導くことができるようになります。

主のみ業を押し進める力

主のみ業の中には偉大な力があります。それは霊的な力です。確認の儀式によって聖霊の賜を授けられている教会員は，主のみ業に加わることができます。

何年も前に亡くなったある友人から次のような話を聞いたことがあります。彼が17歳で宣教師をしていた時の話です。彼は同僚と一軒の小さな家の前で足を止めました。その日は彼の伝道生活の初日で，その家は

彼女はその後，ドアを開けて，「どうぞお入りなさい。あなたが伝えたいということを聞かせていただくわ」と言いました。

宣教師として訪問する最初の家でした。しらが混じりの夫人が網戸越しに，何の用かと尋ねてきました。同僚がそっとひじでつついて，彼に話をさせようとしました。彼はどぎまぎして，何を言っていいのか見当がつきませんでした。そしてだし抜けに，「神がかつて人のごとくあられたように，人も神のごとくになることができます」と言ったのです。

奇妙なことに，相手の女性は興味を示し，その言葉がどこに書いてあるかと尋ねてきました。彼が「聖書の中です」と答えると，彼女はちょっと戸口を離れ，聖書を持って戻ってきました。彼女は自分はある教会の牧師であると告げ，彼にその聖書を渡して言いました。「それでは，どこにあるのか，場所を教えて下さい。」

彼はそわそわしながら，あちこちページをめくりました。しかし最後にはそれを彼女に戻し，こう言いました。「見つけることができません。聖書の中にあるのかどうかも不確かです。あったとしても，見つけられないと思います。私はユタ州のキャッシュバレーの貧しい農民の子供で，あまり教育も受けていません。でも私の家族は皆，イエス・キリストの福音を実践しています。福音は私たち家族にたくさんの祝福を注いでくれました。2年間自費で伝道し，自分の思っていることを人々に伝えようと決心したのもそのためです。」

彼女はその後，ドアを開けて，「どうぞお入りなさい。あなたが伝えたいということを聞かせていただくわ」と言いました。その時のことを語った彼は，それから半世紀も経っているというのに，涙を止めることができないほどでした。

このみ業には偉大な力があります。みたまの助けを受けた教会員は，このみ業に働くことができるのです。

話したいことはまだまだあります。祈り，断食，神権と権能，正しい生活など，皆啓示の中で本質的な要素を成すものばかりです。私たちがそれらを正しく理解すると，それらはひとつとなって完全な調和を見せてくれます。しかし，一人一人が，自分自身で，みたまによって学ばなければならない事柄も幾つかあります。

ニーファイは聖霊や天使についての素晴らしい説教を途中でやめ，こう言っています。「私は……これ以上話すことができない。『みたま』が私に話すなと仰せになる。」（IIニーファイ32：7）これまで私は自分の能力の最善を尽くして話してきました。みたまがわずかに幕を開き，啓示，霊的な交わりという神聖な原則が真実であることを証してくれるでしょう。

口にするにはあまりにも神聖なことですが，私は神が実在し，また，イエスがキリストであり，確認の儀式の時に授けられた聖霊の賜が神からのものであることを体験を通して知っています。

モルモン経は真実です。

この教会は主の教会であり，イエスはキリストです。私たちを管理する予言者が与えられています。奇跡の時代は終わっていません。また，天使が人々に現われ，導きを施すことがやんだわけではありません。この教会には霊的な賜があります。その中で最も素晴らしいものが聖霊の賜なのです。

アンデスの
インディオに伝わる
洪水伝説

カーク・マグレビー

数多くの民族の間にかつて世界的な洪水があったという伝承があります。バビロニアのギルガメッシュ叙事詩や，ギリシャ神話のデウカリオンとピエラの話もその中に入ります。イギリスのウェールズとインドは文化的な背景を異にしますが，面白いことに，両方とも聖書のノアの物語に類似した伝説を持っています。(創世6－8；モーセ7：38－45；イテル13：2；アルマ10：22) これらの伝説は細かい点においてはかなり違うところがあり，地域的な差異も見られます。しかし，そのほとんどが基本的な共通点を持っています。(1)人類が邪悪になり，神に逆らうようになった。(2) 全世界的な洪水で罪人たちが滅ぼされ，地が清められた。(3)ひとつの正しい家族かグループが，さらに優れた新しい人類を起こすために取って置かれた。

したがって，アメリカ大陸の先住民が神聖な口承の中に，洪水の物語を伝えていても不思議はありません。北アメリカのヒューロン湖やブリティッシュ・コロンビア州から，南アメリカのチチカカ湖やパタゴニアに至るまで，アメリカ大陸の先住民は古代の洪水を記憶し，それぞれに形を変えた物語を伝え残してきました。メキシコや中央アメリカの伝説が，創世記の記述に最も近い関係にあるようですが，物語の面白さという点では，南アメリカのアンデスのインディオの伝承が一番です。

アメリカ大陸の洪水伝説をいまに伝える原資料の多くは，初期に新大陸を訪れ，先住民たちの伝承を採集したカトリックの司祭や探検家たちの記録です。この人々は，自分たちが誤ち，また悪魔の教えと判断した事柄の指摘にはかなり性急でした。しかし，インカ人を初めとする諸部族に関するアントニオ・デ・ラ・カンチャの次の見解には同意見だったものと思われます。

「彼らは独自の記録手段であるキープ(結縄文字) あるいは先祖からの言い伝えを秘めた歌や行事などによって，箱舟と洪水の物語を知り，それを語り伝えていた。」

15年間ペルーに住み，60回アンデス越えをしたフェルデナンド・デ・モンテシノスという人物がいますが，その記録によると，彼はインカに語り伝えられていた洪水が実際にどの年代なのか，算出を行なっていました。モンテシノスの記録によると，インディオたちは第2の日，すなわち創造後第2千年目の終わりから数えて340年前に洪水があったと語り伝えていました。ということは，インカの暦法によっても言えることなのですが，創造後1660年，すなわち記元前2340年ということになります。

また，アンデスのインディオたちは，洪水に対して特別な呼び方をしていました。昔のあるケチュア語の権威者は1608年の記録の中で，インディオたちはそれを，「すべてにおよぶ洪水」という意味の「ルロクライ・パチャクティ」と呼んでいたと書いています。一部インディオの血を引く別の記録者は，16世紀の終わり頃に次のように書いています。

「洪水をヤコ・パチャクティと呼び，それは神からの罰であったと言っていることからも分かるように，彼らは洪水そのものの記憶はとどめていた。しかし，自分たちが洪水後のノアの子孫から出た者であることは覚えていない。」

軍人であり歴史家であったペドロ・サルメント・デ・ガンボアは，洪水の別の呼び名を1572年の記録に次のように書き残しています。

北アメリカから南アメリカに至るまで，アメリカ大陸の先住民は古代の洪水を記憶し，それぞれに形を変えた物語を伝え残してきました。

「とにかく，彼らの神は大洪水を起こしたのである。彼らはそれを『ウノ・パチャクティ』すなわち『地の形を変えた水』と呼んだ。また彼らは，雨は60日60夜降り，すべての生き物が溺(おぼ)れたとも言い伝えている。」

年代記作者として評判の高いペドロ・デ・シェサ・デ・レオンはまた別の形の洪水伝承を記録しています。彼は長年にわたってアンデスを隅なく経巡り，先住民たちの言語，習慣に親しみました。彼の記録は私たちが手にしている中でも最高のもので，彼自身の目撃によるインカ帝国の様子を伝えています。自分が訪問したインディオ諸部族の間に広く行き渡っていた洪水伝承を要約して，シェサは1550年に次のように書いています。

「これらの種族はこう伝えている。インカができるはるか以前の大昔，地上には多くの人々が住んでいたが，ひどい嵐と洪水があり，海はその境といつもの流れを越えてあふれた。そして，水はあらゆる山脈の中でも最も高い峰よりも高くなり，地上の全面を満たし，すべての人々を滅ぼした。……山岳地帯や低地地方出身の者たちの話によると，小さな舟で難を逃れた6人以外は，皆溺れたという。その6人は，その後生まれてきたすべての者の祖である。……これを疑ってはならない。なぜなら，この民のすべての者が口をそろえてこれを確認し，私が書いた通りのことを語っているからである。」

シェサが残した記録に類似したものに，クスコ出身のクリストバル・デ・モリナが1572年に書いた記録があります。彼は，インカの人々について，次のように書いています。「彼らは洪水に関して多くの知識を持っている。そして，水がこの地上で最も高い峰々よりも高く上がったため，人間とあらゆる生き物が滅び，箱に乗って救われたひと組の男と女のほかは，だれも生き残らなかったと伝えている。」

アベンダノというカトリックの神父も，洪水について別の言及をしています。彼はインディオたちにキリスト教信仰を説こうとしましたが，インディオたちの以前の信仰，習慣についても語らざるを得なくなり，ある説教の中で次のように言っています。

「インカの人々は書物を持っていなかったために，これらのことを知らなかった。またかれらの歴史家は，キープによって伝承として昔から語り継いできた事柄も，わずか400年か500年までしかさかのぼれず，それ以前はプルパチャすなわち記憶のない時代であると言っている。それでも，神が水をもって世を滅ぼしたあの洪水のことだけは記憶し，皆が皆，それは人間の罪のゆえであったと言っている。……インディオたちは洪水があったことを認め，それをルロクライ・パチャクティと呼んでいる。」

よくアンデスの洪水伝承の特徴として論じられるのが水に浮く山頂と，差し迫った破局を主人に警告する動物で，この地域のほかにも他の地域の伝承にも現われます。

ベルナルブレ・コボはこのふたつに触れ，次のように書いています。

「クスコ地方のアンカスマルカのインディオたちの間には次のような伝承がある。洪水の時が迫ってきた頃，ひと月の間，この地方に住むラマという動物が深く悲しんで，食を取らず，夜には星ばかりをながめていた。ひとりの飼い主がそのことを気にし，何が原因でそう悲しむのかとラマたちに聞いた。するとラマたちは，洪水によってこの世を滅ぼそうとしている，一団の星に目を向けなければならないと答えた。これを聞いた彼は6人の息子と娘にそれを告げ，食物と家畜をできるかぎり集めることにした。その用意を終えると，彼らはアンカスマルカという高い山へ登った。やがて水が増し，地上にあふれたが，それにつれてその山も高くなって水に浮き，決して沈むことがなかった。そして，水かさが減り，また元のようになると，山も低くなって元の所に戻った。洪水を生きのびたこの飼い主の子供たちから，またこの地方に人間が増え始めた。」

水に浮く山については，1598年に年代記作者フランシスコ・ダビラが書いた記録にも，面白く描かれている。

「彼らは，昔の世界は滅ぼされる運命にあったと言っている。そしてそれは次のようにして事実となった。あるインディオが自分のラマを美しい牧場につないだ時……そのラマが彼にこう言った。『ロコ，あなたは何を知ってるの。あなたは何を考えているの。私の言うことをよく聞いておくれ。5日としない内に海が水かさを増してあふれ出し，最後には，地上を水で覆ってしまうことになる。あなたはビルカコトのてっぺんに逃げなければならない。』持ち物を背負い，ラマをひもで引き，そのインディオは言われた山の頂上に行った。そこには数多くの動物や鳥が群れ集っていた。……水はこのビルカコトの頂までは達しなかった。……しかし水かさは非常に高くなり，恐れおののく動物たちの中には，ほとんど水につかっているものもいた。たとえばキツネは水際ぎりぎりの所でしっぽを波に洗われていた。キツネのしっぽの先が黒いのはそのためである。5日目が過ぎようとした時，水は引き始め，海は元の高さに戻り，最後には以前よりも低いところまで後退した。このようにして，そのインディオを除き，全地から人間が取り除かれたのである。」

アンデスの洪水伝承の中には，二度と全地を覆う洪水はないという，神と人との契約の象徴である虹に言及したものもあります。この伝承について触れたものとしては，少なくとも，ふたりのスペイン人による記録を挙げることができます。1586年にカベロ・バルボアが書いた次の記事は，クスコの町へ向けて出発したアヤル兄弟会についての記録の中の一節です。

「彼らは，現在グアナカウリアと呼ばれている山へ来た。ある日の夕方，彼らは同じ山のふもとから立っている虹を見た。マンゴ・カパカは他の者たちに，それは世界が二度と水では滅ぼされないことを示すよいしるしであり，彼についてその山を登るなら，そこから，自分たちが落ち着く先を見渡せるようになると言った。」

同じような話が，1572年のモリナの記録の中にも見られる。

「アヤル兄弟会の面々はその頂を登りつめ，そこで，先住民たちがグアナカウリアと呼ぶ虹を見た。マンゴ・カパカは彼らに，『これは，この世は二度と水では滅ぼされ

インディオたちは，その地域で生活を営む以前の太古の時代に洪水があったということ，それは神の命によって引き起こされたということを信じていました。

ないというしるしである』と語った。」

あるスペイン人は，将来のノアの洪水にも匹敵する破壊がどのような形となって襲い来るかを，インカの人々が理解していたことを書き残しています。次に引用する記事は，1653年に初めて記録されたものです。

「この点に触れた他の伝説は，洪水に関連して，その最初の人間についての話から始まっている。このインディオたちは皆，ビラコーチャの意志であるということ意外に何も知らなかったが，洪水について素晴らしい知識を持っていた。そして彼らは，地はかつて洪水で滅ぼされたように，ききん，悪疫，火の3つによって再び滅ぼされると信じていた。」

アンデスのインディオたちの洪水に関するすべての知識を見ていくのはなかなか面白いことです。情報量がきわめて少なく，伝承を記録したスペイン人たちの観察対象種族が様々に異なっているという事実もありますが，その伝承をひとつに合わせると，インディオたちの洪水に関する知識がより生き生きとした描写を持って迫ってきます。インカを初めとするこの地域の諸部族は，彼らがその地域で生活を営む以前の太古の時代に洪水があったということ，それは人間の罪が原因で，神の命によって引き起こされたということを信じていました。彼らはひとりの人間，あるいはひとつの家族が救われたことを知り，多くの動物の救いと洪水とを結び付けて考えていました。彼らに伝えられていた洪水から逃れるための手段は，舟というケースもあれば，高い山の峰というケースもあります。中には水に浮く峰というものまであります。それらの中には，洪水は古代世界の災厄（さいやく）の一象徴であり，将来は火と疫病による滅亡があるという考えがありました。また，彼らは虹を，地は二度と洪水によって滅ぼされないという約束と結びつけていました。アンデスの先住民たちには，彼らの文明全体の中で広く用いた文字体系というものがなかったためにその伝承はほとんど口承という形を取り，父から子へと代々伝えられる内に，姿を変えてきました。しかし次のバスケス・デ・エスピノサの考えは，妥当なものと言えるのではないのでしょうか。彼は1630年の記録の中でこう書いています。

「このように，インディオたちは今に致るまで代々伝承によってその物語を保存してきたが，これまでによく記憶していたのは，彼らがこの地に来たのが，洪水からそれほど経っていない時だったからである。彼らが真理の中に誤りと迷信を混じえてしまったのは，時の流れと文字を持たないという要素があったとはいえ，先祖からの伝承によって，洪水に関する記憶と知識をとどめていたからこそであった。それらの過誤や迷信は真理の光を曇らせはしたが，なおかつ，かすかにきらめきを残しているのである。」

モルモネード

うわさ話

それは聞く人の手も汚します

小さな

中おうしょとうきょう会会長
ドゥワン・ジェイ・ヤング

わたしが6さいのとき，お父さんがビンボーをもらってきました。ビンボーは，お父さんのオーバーのポケットに入ってしまうくらい小さな，黒と白のフォックステリヤでした。わたしはお兄さんのアランと一しょに，毎日ビンボーにえさをやりました。ビンボーが大きくなると，おふろにも入れてやるようになりました。ビンボーのおふろのときは，わたしもアランもビンボーと同じくらい，びしょぬれになりました。ビンボーは家ぞくのようでした。ビンボーは4さいでしんでしまいましたが，その4年のあいだにいろんなことがありました。ある冬のこと，アランがしょうこうねつになってしまいました。そのころは，しょうどくのくすりもあまりなかったので，びょう人の家の人は，外へ出てはいけないことになっていました。ですから，お父さんはおじいちゃんの家へ行って，そこから会社に通いました。

おいしゃさんのほかは，だれも家に来ませんでした。おいしゃさんが来て，お母さんがドアをあけると，ビンボーは外へとび出しました。そうすると，お母さんもわたしも道にとび出して，ビンボーをつれて帰ってくるのでした。お家にとじこもりっきりでも，たいくつではありませんでした。

ある春の日のことでした。うらにわにビンボーが，しんだように長く

おだべ友ち

なっていました。「しょうこうねつかしら」とわたしは思いました。じゅういさんにつれていくと，どくの入ったものを食べてしまったことがわかりました。ビンボーは，しばらくびょういんに入っていました。わたしたちは，ビンボーのために毎日おいのりしました。おいのりはこたえられ，ビンボーはよくなりました。

その次の年の夏，わたしたちは山の家ですごしました。ビンボーは森の中を走りまわったり，リスをおいかけたりしました。そんなある日，ビンボーはしっぽをたらして帰ってきました。見ると，顔いっぱいにヤマアラシのトゲがささっていました。わたしたちはビンボーをもうふにくるんで，近くの小屋にいるおいしゃさんのところへつれていきました。おいしゃさんは，トゲをぬいてくれました。わたしたちは，ビンボーはもうこりただろうと思いました。ところが，次の日またビンボーはヤマアラシをおいかけ，トゲだらけになって帰ってきました。わたしたちはまた，おいしゃさんのところへビンボーをつれていきました。

せわがやければやけるほど，わたしたちはビンボーがすきになりました。そうするとビンボーも，またわたしたちをすきになりました。ビンボーはいつも，ほえたり，しっぽをふったりしてあいさつしました。わたしは，本当の友だちになるほうほうを，ビンボーからならいました。

わたしはだんだん大きくなって，友だちをつくるには，友だちにならなければいけないことがわかりました。時間をかけてビンボーのせわをしたように，時間をかけて友だちにあいをしめさなければなりません。ときどきわたしは，友だちの話を聞いてあげました。それから，でんわで「あそびにいらっしゃい」とさそってあげました。友だちは，とてもうれしそうでした。

学校に行くようになると，友だちをもっとたくさんつくることができました。ある時，わたしはやきゅうのチームに入れなくて，とてもさびしい思いをしました。だから，自分がえらぶ番になったときには，さびしそうな人を入れてあげようと思いました。新しい子がクラスに入ってきたときには，友だちになってあげました。そうすると，わたしまでうれしくなりました。

今わたしは，中おうしょとうきょう会の会長なので，せかい中のいろいろな人と友だちになることができます。ボリビアに行ったとき，スペイン語はぜんぜんわかりませんでしたが，ボリビアの子どもたちのあいはかんじることができました。それから，先生と子どもたちがあいしあっていることもわかりました。わたしは日本語もわかりませんが，日本の子どもたちがわたしをあいしてくれていることは，わかりました。あいは，とても大切です。イエスさまも，「神さまをあいしなさい。自分のように，お友だちをあいしなさい」とおっしゃっています。

正しいことをして，天のお父さまにあいをしめしましょう。また，お友だちには親切にしてあげましょう。自分のしてほしいと思っていることを，してあげましょう。先生にも，家ぞくにも，お友だちにも，ワンちゃんやネコちゃんにも，あいをしめしましょうね。

まつじつせいとイエス・キリストきょうかいでは，だんじきは，とてもたいせつです。ほら，アッくんとおとうさんが，だんじきのことを，おはなししていますよ。きいてごらんなさい。

アッくん： どうして，だんじきにちようびがあるの。だんじきって，なあに。

おとうさん： だんじきっていうのは,なんにもたべないで,なんにものまないことだよ。イエスさまも，だんじきをしたんだよ。

アッくん： なんにもたべないでなんにものまなかったら，しんじゃうよ。

おとうさん： そうだね。ちょっとつらいね。てんのおとうさまは，ちいさなこどもは，だんじきをしなくてもいいって，おっしゃっているよ。アッくんもおおきくなって，だんじきしたいなっておもうようになったら，さいしょは1(いっ)かいだけ，ごはんをぬくといいね。

どうしてだんじきにちようびがあるの？

アッくん： でも，どうして，だんじきするの。

おとうさん： それはね，イエスさまのおしえだからだよ。せいてんにも，だんじきのことが，かいてあるよ。〔出エジプト34：28; マタイ４：２; ６：16-18; ヒラマン３：35; 教義と聖約59：12—14〕

それから，だんじきするのは，こまっているひとをたすけるためでもあるんだよ。だんじきをして，あまったおかねで，こまっているひとをたすけるんだ。それに，だんじきをすれば，「もっとたくさんたべたい」「もっ

サリー・ガネル

とおいしいものをたべたい」というきもちをおさえなければいけないことがわかるね。

アッくん： ねえ，いつだんじきするの。

おとうさん： だいいちにちようびだよ。だいいちにちようびには，あかしかいもあるね。あかしかいのときには，いつも，てんのおとうさまのみたまを，かんじることができるね。それは，だんじきをしているからだって，おもわないかい。

アッくん： そうだね。ぼく，あかしかいがだいすきだよ。てんのおとうさまが，ちかくにいらっしゃるようなきがするんだもの。でも，だんじきにちようびしか，だんじきしてはいけないの。

おとうさん： そうじゃないよ。とくべつなしゅくふくがほしいときは，いつでもしていいんだよ。ユキおばさんがガンになったときのことを，おぼえているだろう。あのときは，かぞくみんながだんじきして，おいのりして，それからユキおばさんに，しゅくふくをしたね。てんのおとうさまが，わたしたちのおいのりをきいてくださったから，しゅじゅつは，せいこうしたんだよ。

それに，だんじきをすると，こころがひくくなって，てんのおとうさまのみちびきやおしえを，よくかんじることができるね。

アッくん： どのくらいのあいだ，なにもたべてはいけないの。

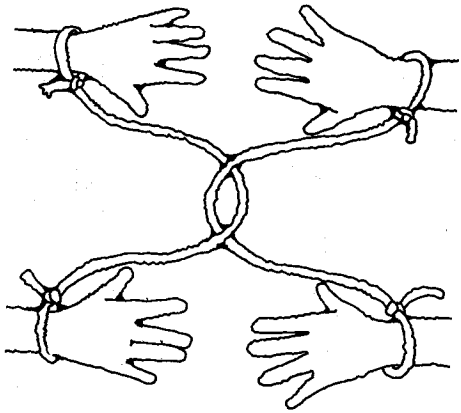
おとうさん： おとうさんとおかあさんは24じかん，まえのひのゆうごはんから，そのひのゆうごはんまでは，たべないよ。

アッくん： ながいなあ。

おとうさん： そうだね。くるしいこともあるよ。そんなときは，「たすけてください」って，てんのおとうさまに，おいのりすればいいんだよ。だんだんに，そんなにくるしくなくなるよ。そのうちにアッくんも，できるようになるよ。

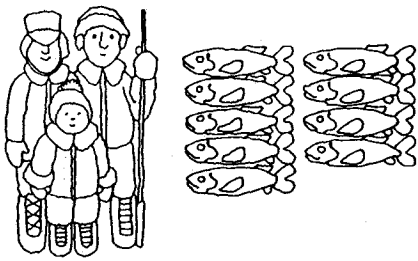
ちえのひも

1メートルのひもを２本ようういします。図のように１本のひもの両はしを，お友だちのうでにむすびます。次に，もう１本のひもを，お友だちのひものあいだにとおして，自分の両うでにむすびます。ほどいたり，切ったりせずに，はずせるかな？



ワカサギつり

9ひきワカサギが，つれました。お父さんが全体の３分の１，おじさんがお父さんの２倍つりました。ぼくは何びきつったでしょう。



にんげんて，おもしろいね。
えさをやってみようか。

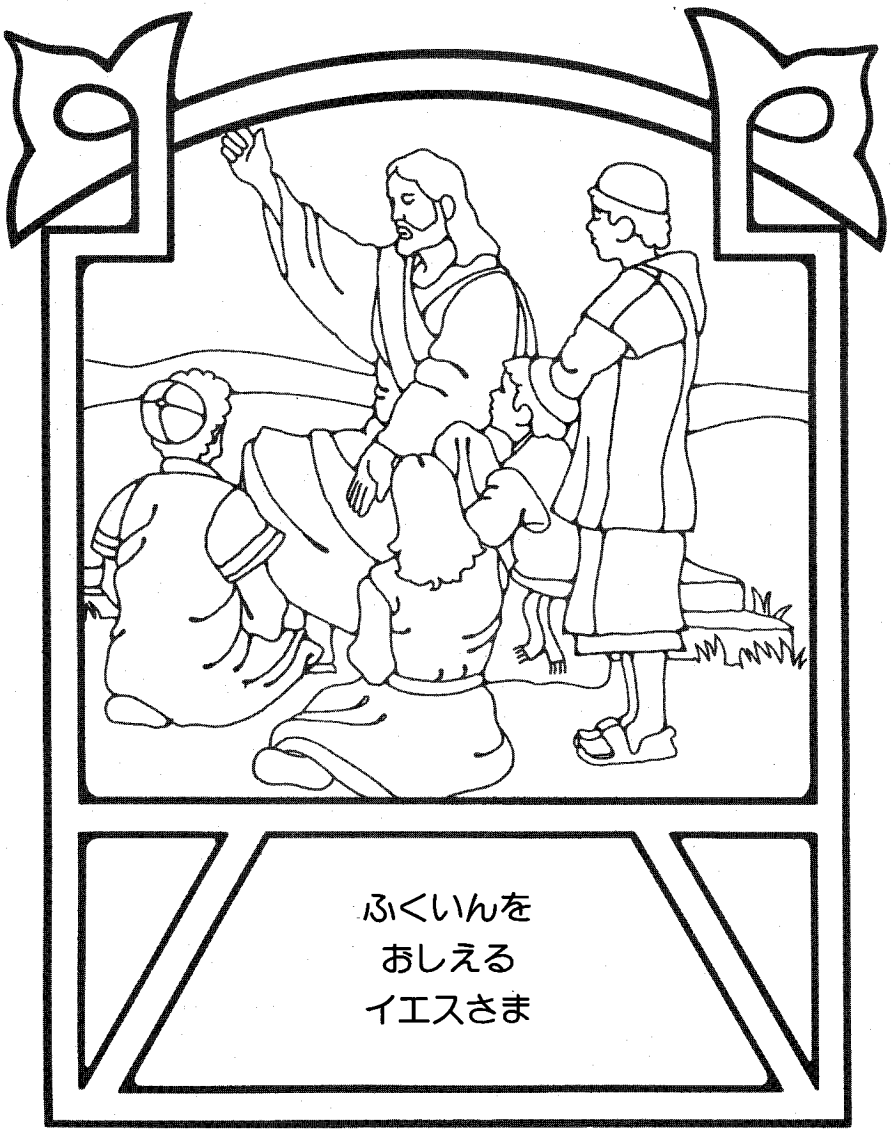
わあ，おそらにうかんでるみたい。

すくいぬしのあいに
まなびましょう

びょうきのひとを
いやすイエスさま

きれいにいろをぬって
かざりましょう

こんしゅうはどのもはんにしたがいますか



ふくいんを
おしえる
イエスさま

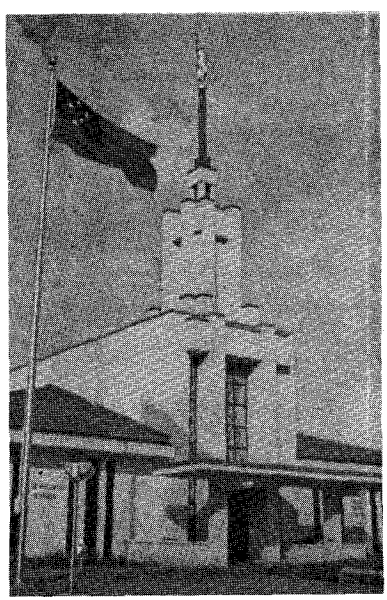
だれかにイエスさまのおはなしをしてあげましたか

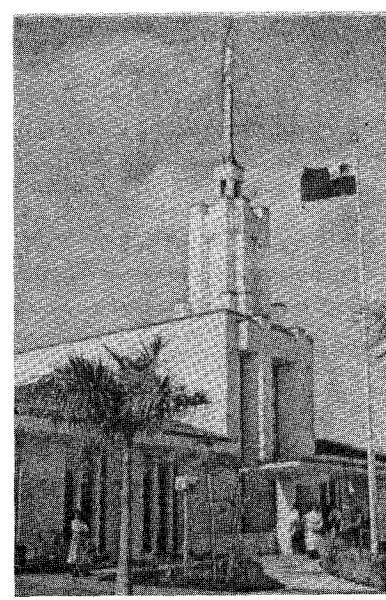
献堂されたサモア神殿とトンガ神殿

サモアとトンガに建設されていた神殿の献堂式が，去る8月，ゴードン・B・ヒンクレー第二副管長の管理の下に行なわれた。

献堂式に先だって行なわれたオープンハ

●トンガ神殿の献堂に先だって行なわれたオープンハウスに招待されたタウファアハウ・トゥプオ国王夫妻





●サモア神殿(左)とトンガ神殿(右)。サモアには二万八千六百人、トンガには二万六百人の会員がいる。世界で二二番目と二三番目の神殿

ウスには，内外から多数の訪問客を迎えた。特に7月9日にヌクアロファで行なわれた特別オープンハウスには，トンガ国王夫妻が招待された。タウファアハウ・トゥプオ国王夫妻は，教会が経営するリアホナハイスクールのブラスバンドがトンガの国歌を演奏する中を，緑と白の制服に身を包んだ末日聖徒の子供たちに迎えられて会場に入った。

また7月18日に開かれたサモア神殿の特別オープンハウスには，西サモアの国家元首マリエトア・タヌマフィリ2世，西サモアの首相エティ・トフィラウを初め，西サモアの政府高官が多数出席した。

「シンデレラのような気持ちです」

ホワイトハウスに招かれたスミス姉妹

【ワシントンD．C．発】中央扶助協会会長バーバラ・B・スミス姉妹が，ホワイトハウスで開かれた公式晩餐会に賓客(ひんきゃく)のひとりとして招かれました。

この社交行事は7月19日，バーレンの首長シャイク・イサムヒ・サルマン・アルカーリーファ氏の公式のレセプションとして行なわれました。バーレンはアラブ首長国連邦のひとつで，ペルシャ湾に浮かぶ島群よりなる国家です。この小国は中東の中でも最も高い生活水準を保っています。この公式晩餐会にはスミス姉妹を含め合衆国から120名が招待されました。

スミス姉妹はこう語っています。「招待さ

●ホワイトハウスの晩餐会でレーガン大統領と話すバーバラ・B・スミス姉妹(写真左)

れた理由はひとつしか考えられません。末日聖徒の女性がこの国にあって偉大な力を持っていることを認めて下さっているからなのです。中央扶助協会会長が公式晩餐会に招かれたのは，今回が初めてだと記憶しています。シンデレラのような気持ちです。招待を受けて本当にうれしく思っています。」

ご主人のダグラス・H・スミス兄弟と共にホワイトハウスに到着したスミス姉妹は，衛兵に案内されて東の間に入り，大統領夫妻に紹介されました。それから晩餐の部屋に移りテーブルに着いたスミス姉妹は，大統領夫妻と同じテーブルになろうとは夢にも思いませんでした。午後7時30分，晩餐の始まる予定の時刻に会場に姿を見せたレーガン大統領が，スミス姉妹と同じテーブルの最後に残った椅子に腰を下ろしたのです。

テーブルを共にしたのは宇宙飛行士のサリー・ライド，バスケットボール選手のモーゼス・マローン，合衆国カトリック慈善会会長のバージル・L・デシャーント，「クリスチャン・サイエンス・モニター」の編集者であるキャサリーン・ファニング，バーレンの外務大臣であるモハマド・ビン・ムバラク・カーリファ，そして共和党国家委員会委員長のベティ・ハイトマンというそうそうたる顔ぶれでした。(*Church News*, August 7, 1983)

再組織された名古屋西ステーキ部長会

●堀田徹兄弟，ステーキ部長に

7月10日，七十人第一定員会会員アドニー・Y・小松長老の管理の下に，名古屋第2ワード部で名古屋西ステーキ部特別大会が開かれた。

ロバートソン元日本伝道部長逝去

日本ならびに中国の伝道部長として活躍したヒルトン・アレクサンダー・ロバートソン兄弟が7月19日，91歳で死去した。ロバートソン兄弟はフィリピン，韓国，グアム，沖縄そして日本の伝道部を管理し，1951年にはサンフランシスコのチャイナタウンで中国伝道部を開設した。日本の伝道部を管理したのは，1952年から1955年までである。

●再組織された名古屋西ステーキ部長会。左から古芝健三第一副ステーキ部長，堀田徹ステーキ部長，佐藤譲第二副ステーキ部長

この大会で，これまで名古屋ステーキ部が組織されて以来ステーキ部長を務めてきた中村武史兄弟が解任され，堀田徹兄弟（44歳）が新たにステーキ部長に召された。

現在，教会教育部名古屋地区インスティテュート・ディレクターの任にある堀田ステーキ部長は，これまで，副支部長，地方部評議員，高等評議員，日本札幌伝道部長などの責任を歴任している。

第一副ステーキ部長には引き続き古芝健三兄弟，第二副ステーキ部長には大橋稔郎兄弟に代わって新たに佐藤譲兄弟が召された。

堀田ステーキ部長は召しの第一声で「主イエス・キリストを信ずる信仰を土台にし，このステーキ部をエノクの市のように聖なる市とし，福音の律法と儀式を守るシオンを作り上げるように，皆心をひとつにして立ち向かいましょう」とメッセージを述べた。

東京東ステーキ部センター献堂される

去る6月12日，東京東ステーキ部大会に合わせて，東京東ステーキ部センターおよび東京第5ワード部として使用している教会堂の献堂式が，七十人第一定員会会員アドニー・Y・小松長老（東京神殿長）によって執り行なわれました。

当日は雨模様にもかかわらずたくさんの兄弟姉妹が参加し，とても霊的な集会となりました。

今から20年ほど前，日本にはただひとつの伝道部しかなく，現在の東京第5ワード部は，北部極東伝道部東中央地方部東京東支部と呼ばれていました。昭和37年10月，建築宣教師や当時の東支部の会員の方々によって，倉庫として使われていた建物を教会堂に改造して西小岩の現在の地に足場を固めたのです。さらにその建物は，日本に初めてステーキ部が生まれた昭和47年以来，

●七十人第一定員会会員アドニー・Y・小松長老管理の下に行なわれた東京東ステーキ部センター（東京第５ワード部）の献堂式。

東京第５ワード部として使用され，昭和55年２月に新たに始まった現在の建物の着工まで約18年間使用されてきました。

旧建物から現在の建物に至るまでの約18年の間，多くの兄弟姉妹のかかわりがありましたが，献堂式ではその中の幾つかの話を伺い，当時を偲ぶことができました。また，現在の建物は昭和55年２月に着工し，同年10月に完成したわけですが，その時の監督だった神成兄弟は資金不足に直面して会員たちに面接した当時を振り返って次のような話をされました。

ある姉妹は，会員になってわずか数カ月であったにもかかわらず，結婚費用として貯めておいたお金のうちから建築のために献金されたこと，大学生，高校生はお小遣いを喜んで献金してくれたこと，また，教会員でないご主人の理解を得て，多額の献金をした姉妹の証などです。この姉妹のご主人は当日のステーキ部大会で長老に召され，もうすぐ神殿で永遠の結婚を予定しているとのことでした。

最後に小松長老が，聖なる神権の権能により，土地，建物，その他の付属施設すべてが守護され，完全に機能するように祝福し，奉献しました。

神様に捧げられ，また，聖められ守られた教会堂の中で，多くの兄弟姉妹の汗と涙を思い，またその強い信仰と証に触れ，心に湧き上がる勇気を知りました。これから先，この教会堂に集うたくさんの兄弟姉妹たちが，この建物の中で様々な経験を通して信仰と証を育んでいくに違いありません。

（レポーター：東京東ステーキ部高等評議員・**三浦正弘**）

嵐の中で築かれた信仰と友情

――東京北，東ステーキ部合同サマーカンファレンス――

８月15日から18日までの４日間，山梨県道志の森キャンプ場で東京北，東ステーキ部合同のサマーカンファレンスが

開かれました。

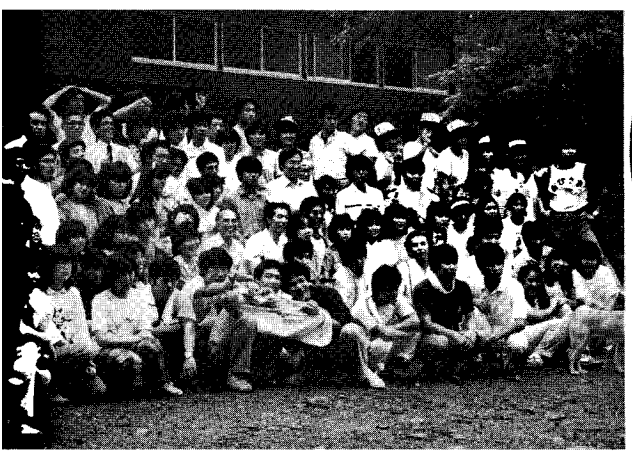
今回のカンファレンスでは一流講師陣を招いてのセミナーや，多くの野外活動を通して自己を見つめ直し，自分自身の生き方を見つけようというテーマを掲げてプログラムが組まれました。

大型台風の影響によってプログラムのほとんどが変更を余儀なくされたにもかかわらず，グループリーダーを中心に一人一人が自ら積極的に参加していこうという意識が高まり，プログラムは次第に活気をおびていきました。

セミナーを初めタレントショー，フォークダンス，ゲーム大会，そして最後の夜，食堂を借り切ってのキャンドルサービスは，最高潮に達し，その歌声は嵐の中に響き渡りました。証会においても兄弟姉妹たちの力強い証や決意は私たちの霊を奮いたたせました。

私たちはこのカンファレンスで多くの経験をすることができました。末日聖徒の開拓者が厳しい環境の中を旅してついに約束の地にたどり着くことができたのはまさにイエス・キリストの愛と一致の精神があったからでしょう。私たちも一時は台風の影響で孤立するという最悪の状況に陥りましたが，最後まで無事にこの大会を終えることができたのは開拓者と同じ精神が一人一人にあったからだと信じています。

さらに嵐の中，危険を冒して駆け付けて下さった神崎ステーキ部長，福田ステーキ部長に心から感謝したいと思います。指導者の私たちに対する思いの深さを改めて知ることができました。この嵐によって私たち一人一人の上に築かれた信仰と友情は深く心に刻まれることでしょう。（レポーター：東京東ステーキ部東京第5ワード部サマーカンファレンス実行委員長・**佐々木利宏**）



●山梨県道志の森キャンプ場に集った110名の参加者

●サマーカンファレンスは雨にたたられたが，セミナーや室内での活動を中心に楽しい4日間を過ごした

仏教からキリスト教へ

―声を上げて泣きました―

大阪ステーキ部八尾支部
前田 美代栄（77歳）

私は昨年，主人と死別して今は姪と姪の子供ふたりとの４人暮らしです。今年で77歳になりました。

これまで過去50年の長い間，仏教に凝り固まっておりました。それもお経を百万遍（百万遍といいますとほとんど朝から夕方まで３年間毎日唱えます）唱えたり，仏教の般若心経というお経を千巻写経したりしました。また，寒中滝に打たれて50回位水行を致しました。そのために大僧上から印を授けられたり，本山寺院から表彰されたりし，ずいぶんほめていただきました。

それほど仏教に凝り固まっていた私を末日聖徒イエス・キリスト教会に導いて下さったのは昨年10月中頃，私宅を訪ねてくれた堀長老とダルウィン長老というおふたりの宣教師でした。

生まれて初めて神様のお話を聞かせていただき，心身共にすがすがしく感じました。２，３度お話を伺っている内に神様に召された方はなんと素晴らしいのだろうと，彼らの人柄に心打たれました。その素晴らしい宣教師たちのお話を聞いてから，彼らの教えや戒めを守って実行しようと，その時心に決めました。彼らは私のような老人にもよく分かるように話して下さいました。そして教会の兄弟姉妹の深い愛に包まれて，昨年11月28日，バプテスマを受けさせていただきました。心から感謝しています。

長い間の仏教生活で心の整理もなかなかつかないように思っておりましたが，バプテスマを受ける１週間前に心の整理ができて，仏様のお道具も全部きれいに片付けさせていただきました。

バプテスマを受けてからはテレビの娯楽ものの番組は一切見ないようにしています。そして１日５時間位の時間を聖典を読むことに充てています。

什分の一の献金も多くても少なくても心からの感謝と喜びの心を添えてしなければなんにもなりませんので，いつも喜んで納めさせていただいております。もっと，たくさんの献金をしたいと思っております。それは，偽りのない私の気持ちです。

私はこれから先何年生きられるか分かりませんが，余生全部を神様に捧げ，天のお父様の娘として立派に成長したいと心から願い，決心致しました。深く深く決心した瞬間，涙が滝のようにあふれ出て止めることができませんでした。声を上げて泣きま

した。悲しい涙ではありません。それは生まれて初めて経験する大きな喜びの涙だと思います。

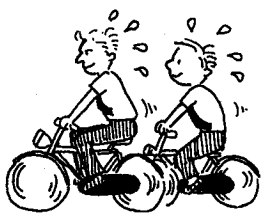
バプテスマを受けてまだ4カ月ですが，神様が見守って下さっているのがはっきり分かるようになりました。正しい願いを真心込めてお祈り致しますと神様は必ず聞いて下さいます。迷っていることや私の知らないことまで教えて下さいます。これほど年をとってから，こんなに幸せになれるとは夢にも思っておりませんでした。

若い方は理解力もあって，教会へ入るのもたやすいでしょうが，年寄りにはなかなか難しいことです。私のように幸せになれるよう，皆様の力で若い方はもちろんお年寄りも導いてあげて下さい。

私はいつも思うことがあります。電車に乗ったり道を歩いたりする時，たくさんの人に出会います。彼らを見ると20代は20代，30代は30代，40代は40代とその人の年齢に応じ，これまでその人がしてきたことがすべてその人の顔に出ています。人のために尽くしてきた人，心優しい人，いつも徳を積んでいる人はその顔が何ともいえない柔和な顔をしています。自分のことばかり考え，人を押しのけてでも地位や財を求める人，心のきつい人の顔は，やはり険があります。美男美女ということとは別で，皆その顔に表われています。顔は包んで隠すことはできません。一番先に人に見てもらう所です。自分の心を見てもらうのですから，いつも心と行ないを正すことが大切だと思います。この教会へ来ておられる兄弟姉妹の皆様は，みな柔和な顔をしています。私も，もっともっと徳を積んで，優しい顔になりたいと思っています。

先月，姪と妹が宣教師や教会の兄弟姉妹のお力添えでバプテスマを受けました。これで家族全員がバプテスマを受けたことになり，こんな素晴らしい大きな喜びはありません。神様でなければできないような問題も祝福されてすっかりきれいに解決致しました。神様にお礼の申し上げようもありません。最後に私の一番好きな聖句を引用させていただき，私の証の結びと致します。

「私はあなたたちが謙遜，従順，柔和であって容易に勧告に従い，忍耐強くてよく堪忍し，何事（なにごと）にもひかえ目であっていつも神の命令を熱心に守り，肉体の上にも霊の上にも必要なものを願い求め，何物を受けてもいつも神に感謝をすることを望んでいる。信仰と希望と愛とを必ず固くもつように心がけよ，そうすればいつも善い行いを多くするにちがいない。」（アルマ7：23－24）（**まえだ・みよえ** 1906年生まれ，八尾支部扶助協会教師）



安息日との闘い

——「まず神の国と神の義を求めよ」——

大阪北ステーキ部
高槻ワード部
安藤 互

私の家は，高校時代に父が経営する会社が倒産したので，財産すべてを失ってしまいました。

そのような状況でしたので，両親はいつもけんかばかりしており，ついには別居をし，すべての面でとてもつらい日々を過ごしました。その苦しくつらい日々の中で，私はふたつの決心をしました。「自分で店を持ち，何か商売をし，失った家や財産を取り戻そう。」そしてもうひとつ，「自分の愛する妻を本当に幸福にしよう，大切にしよう」と。

その当時の自分の家庭環境を見て，このふたつの決心だけは，どんなことがあっても捨てまいと思ったのです。もちろん，まだ将来を掛けて愛する女性も仕事もない17歳の高校生だったのですが……。

そして，23歳の時に念願の店を中華料理店という形で開くことができました。ところがその1年くらい前に，結婚を決意した女性が現われたのです。

当時，大学1年生になったばかりの彼女は，モルモンでした。何でも言うことを聞いてくれた彼女ですが，教会のことになるとまったく私の思う通りにならず，自分の意志を曲げない女性で，初めてのデートも六甲に行きましょうと行って神戸ワード部の聖餐会に連れて行かれたほどです。この相反するふたりが愛し合い，お互いが必要とし合い，結ばれたいと願ったので，自分の愛する人を幸福にするという決心はその第一歩を踏み出しました。

彼女がどうしてもモルモンの家庭を築きたいと言ったので，付き合い初めて7カ月後の1974年11月2日にバプテスマを受けました。

正直言って，私には神を信じる信仰などまったくなかったのです。ただ彼女を喜ばせたい，彼女と結婚したいという願いだけでした。

その2カ月後に店を開店し，それから私の安息日との闘いが始まりました。安息日を守るために，店を人に任せて，一時期はサラリーマンとの2足のわらじの生活をしてきました。その内に店が3軒になり，どうしても会社に勤めることができなくなっ

てしまいました。安息日を守るために余分に従業員を雇いました。出入りの銀行の人や同業の人に，少し人が多いのと違いますかと，よく言われました。そんな状態でしたから，自分ほど犠牲を払って安息日を守っている者はいないぞと思っていました。

ところが最近になって，人件費がかさんだことやその他のことで店の経営が少し思わしくなくなってきました。悩んだ末に，こう考えたのです。「今までこれ位に犠牲を払ってきたんだから，2年くらい教会を休んで，自分が全面的に店に入り，従業員を減らして，店を立て直そう」と。妻にそのことを言いました。私たちふたりは，1977年4月23日に結婚し，ふたりの可愛い息子とお腹の中にもうひとりの子供を授かり，幸福な毎日を過ごしていたのですが，その時彼女はとても悲しそうな顔をしました。「仕方がない。せっかくここまでやってきたのだから何とか店を守ろう。それでいいんだ」と，自分に言い聞かせていました。

ところが何かの集会で礼拝堂に座っていた時，急に淋しくなったのです。「ああ，しばらく来れないのか」と思っていると，「まず神の国と神の義とを求めなさい」(マタイ6：33) という聖句が浮かんできました。「自分は今まで何に仕えていたのだろうか。何を求めていたのだろうか。自分自身を，家族を幸福に導くのは財産なのか。この教会の生活こそ守らなくてはならない一番大切なものではなかったのか。愛する妻を本当に心から幸福だと言わしめることのできる生活とは，この真の教会の教えにこそあるのではないか。」私はやっと分かったのです。

「よし，店を縮小しよう」と決心しました。まったく何もないゼロからスタートして大きくした1号店を処分しました。「安息日を精神的にも完全に守れるような状態を必ず作ろう。」そう決めた時，不思議にも残念な気持ち，惜しい気持ちなど少しもありませんでした。むしろ今まで多くの犠牲を払って守っているんだと自負していた安息日というものが，実は「守らせていただいていたのだ。神様本当にありがとう」という気持ちになり，たくさんの祝福を受けていたことを知ったのです。

教会に入って9年，やっと門の前に連れて来られた気がします。こうした結論を出した時に，不思議と副監督の召しがきました。私は喜んでお受けしました。(**あんどう・わたる**
1951年生まれ，
高槻ワード部
第二副監督)

●訂正●

9月号5ページ右段にある日本聖書協会口語訳の「わたしは肉を離れて神を見るであろう」(ヨブ19:26) の引用は，欽定訳聖書（英文）によると肉において神を見るであろうとの意になっています。また6ページの右段2行目の「時の絶頂の神権時代」とあるのは「時満ちたる神権時代」の誤りです。おわびして訂正します。

「あなたの手に善をなす力があるならば…」

―ある深夜のいたずら電話で―

高崎ステーキ部桐生ワード部
金子 延子

私がこの教会の会員になって，3年が経ちました。その間，本当にたくさんのことを学びました。特に扶助協会のレッスンは，子供の良き母親となれるよう，良き導き手となれるようにとの私の願いをかなえてくれるものでした。

そんな折，今年の2月13日の夜中の2時頃，ある高校生からいたずら電話がかかってきました。何事だろうと思い，急いで電話に出ました。「もしもし，中学生ですか，高校生ですか」と問いかけてきました。私は怒ってすぐ電話を切ることもできたのですが，教会員として，特にその日は安息日でもあったので，この電話を無駄にしてはいけないと思い静かに話を始めました。

彼はシンナーを吸い，タバコを吸っていると言いました。わたしは，「あなたたちはそれが悪いと知っててやっているんでしょう。やってみたい時期なんでしょう」と言い，いろいろ話を聞くうちに，耳を傾けてくれる気配を感じたので，「神様を信じますか」と聞きました。半分だけ信じるという答えだったので，私の大好きな聖句である伝道の書第11章の8，9節と第12章の1節「若い者よ，あなたの若い時に楽しめ。あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心の道に歩み，あなたの目の見るところに歩め。ただし，そのすべての事のために，神はあなたをさばかれることを知れ。」「あなたの若い日に，あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり，年が寄って，『わたしには何の楽しみもない』と言うようにならない前に」を詩を読むように読んであげました。すると彼は「よく分からないけど，いい詩ですね。おばさんは優しい人ですね。ここにおれの仲間がいるから，みんなにも何か言ってやって下さい」と言いました。そしてひとりずつ学校と名前を言ってもらい，話をしました。ひとりの子供は，自分の持っている悩みも話してくれました。ただ聞いてもらいたいという感じでした。「大人たちはだれも俺たちと話をしてくれない」という彼らの言葉に，私は自分に与えられた責任と才能を理解したような気がしました。

彼らは私の家に遊びに来たいというので，住所を教えました。また，彼らの要求のバレンタインチョコレートを用意して待っていたのですが来ませんでした。

そこで2月17日，学校名と名前を聞いて

いましたので一通の手紙を用意し，彼らに会うために学校へ行きました。確かに彼らはいました。ぜひ遊びに来るようにとも伝えたのですが，それっきりになってしまいました。

私自身も主人と子供を持つ身で，それ以上のことはできませんでした。しかし，その日のことが忘れられず，悩み，迷っている子供たちに何かをしなければと思い続けていました。そして，ひとつの文章をまとめました。「人間の価値について」というものです。どんな人間でも皆，この世に必要で，無くてはならない存在なんだと訴えたくて書きました。書いただけでなく，それを伝えたくて，ある中学校の校長先生に会いました。

非行の問題について話し始めた時，初め険しい顔をしておられた校長先生もだんだん話が和んで，私のことや話を理解して下さいました。最後に「良いお話，勉強になりました」と言って下さいました。また「何か信仰を持っていらっしゃるんでしょう」と言われましたので，「はい，モルモンです。末日聖徒イエス・キリスト教会の会員です」とお答えしました。宗教を持っている人は良い意味で強いと言われました。そして，きょうの話を無駄にせぬよう，生徒たちに話すと言われました。私は神様の言葉に従って本当によかったと思いました。

校長先生に会うために電話をする前，祈り，聖典を読みました。箴言第3章27節に，「あなたの手に善をなす力があるならば，これをなすべき人になすことをさし控えてはならない」とありました。私には大した働きはできませんが，またひとり，福音を分かち合えたのではないかと感謝しています。（**かねこ・のぶこ** 1951年生まれ，桐生ワード部扶助協会教師）

胸を熱くした「聖徒の道」

新潟地方部新潟第1支部
石田 タエ

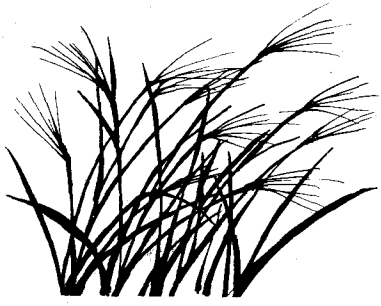
今年の7月，ホームティーチャーである岡村兄弟と吉田地方部長の訪問を受けました。ひとわたり話した後で，吉田地方部長は「石田姉妹，今度は聖典を読む時間がたくさんありますね」と言われました。私は，内心どきっとしながら，以前から頭の中から離れなかった「聖典は正座して読まなければ罰が当たる」という疑問について尋ねてみました。すると「そんな固苦しく考えなくてもいいでしょう」という答えに本当にうれしくなりました。

彼らの訪問を受ける1週間前に軽い目まいを起こして階段から転落し，腕を骨折しました。重いギブスを付けた手をもてあましていたこともあって，今まで読みたいと思って買ってあった本をもっぱらせっせと

読み耽るような時を過ごしていました。そんな折の訪問だったのです。

その晩，布団の中で自分の責任について考えてみました。長いこと教会を離れていた私は，昨年の7月，夫が退職し，ほどなくして任地の直江津から引き上げました。息子夫婦との同居のために家事と孫の世話に追われていた私に「お嫁さんもいることだし日曜日くらい休ませてもらいなさいよ」と，お向いの大先輩のおばあちゃんが助言して下さったこと，さらに夫の第2の務め先も決まったこともあって，昨年の8月の半ば過ぎ頃から，おそるおそる遠ざかっていた教会に出席し始めました。教会の皆さんが私の顔を見て寄って来られ，特に古い会員たちが，とても喜んでくれました。その時の私はただどぎまぎするばかりでした。

9月の証会で，支部長が「石田姉妹が毎日曜日，出席して下さってうれしい」と言われた言葉が胸にしみました。11月になり，面接で角姉妹の後を受けて，図書委員の責任を頂き「聖徒の道」の発注責任者になりました。この時，私も1月号から予約しましたが，最初の1，2冊目を通しただけでそれ以降は封を切って積んだままにしてありました。今になってそれではいけないと考え，早速今年の1月号から8月号まで苦心してファイルに綴じ込みながらいろいろなことを思い出していました。



私が初めてふたりの外人宣教師の訪問を受けたのは15年前のみぞれの降る寒い日でした。3月の寒い日にもかかわらずふたりが着ていたのはオーバーコートではなく，レインコートでした。当時，来たばかりの新任宣教師であったサドロー長老は，私がバプテスマを受けた時，石ころの中からダイヤモンドを拾い上げたように喜んで下さったのに，今の私は名ばかりのモルモン。苦笑しながら「聖徒の道」に目を通していました。

ローカルページのひとつのタイトル(「すべての事に感謝しなさい」〔1983年6月号，pp.60－62〕)に心引かれて読んでいると，胸の中が熱いもので一杯になりました。次々と読み進んでいくうちに，いつしか涙が頬をぬらし活字がかすんでしまうほどになりました。今までなぜ，もっと早く心を落ち着けて読まなかったのでしょう。

些細な事で教会が嫌になり，不活発だった長い間，一度も「聖徒の道」すら読むこともなく，現在の家に新築移転する際には活発だった頃，大切にしていた「聖徒の道」をごみと一緒に捨ててきたのです。今この証を書きながら「なんて愚かなことをしたのか」と唇をかむ思いをしています。

「まことに主は生きておられます」と，

今まで何度も証してきました。しかし，今ほどに胸が熱くなり，この教会が真実なものであると感じたことはこれまでありませんでした。

愚かな者はみなつまずくのでしょうか。私はつまずき，挫折して，離れて考えてみる時間が長かったから，今，この感動がことさらしっかり伝わってくるのだと思います。それに頑(かたくな)な私には，長い道のりが必要だったのです。主は備えなしでは何事もなされないと言われました。この責任を受けなかったなら，おそらく「聖徒の道」を購読することもなかったでしょう。

家庭の中で私ひとりがモルモンの現状では，それも仕方ないこととして，聖餐(せいさん)にあずかるだけで何ら努力することもなく日々が過ぎていったことでしょう。

骨折も，医者が驚くほどよい状態で快復しています。この癒(いや)しや，心の落ち着きを取り戻した現在でも，信仰と知識が欠けていることをホームティーチャーの訪問と責任とによって知ることができました。図書

神のみ業に進みて　JMTC第50期生20名

（讃美歌95番）

●７月に召された20名の日本人宣教師。７月19日から27日までの９日間，教会管理本部でトレーニングを受けた。

委員に按手任命を受けた時に「この責任が，みたまの助けによって果たされますように」と言われた意味が，今になって理解できるのです。

「羊を守れる羊飼いの愛……其を連れ戻さんと羊飼はゆく」（讃美歌54番）

愛のみ手は，常に差し伸べられていたのです。思いがけない事故が一転して，祝福と代わったこの経験を，そして責任を通して証が強められたことを感謝しています。（**いしだ・たえ**　57歳，新潟第１支部図書委員）

編集室から

●「お母さん，『聖徒の道』のローカルページだけでも読んでくれてる？」と遠くに住む両親に電話で聞くと，ローカルページだけでなく，ほとんど全ページに目を通しているとのこと。里帰りしてみると，テレビの上に置いてあった「聖徒の道」を妹や祖父までが時々手にし，拾い読みしている。離れて住んでいると教会のことをなかなか伝えられないが，プレゼントで送付している「聖徒の道」が私にかわって証をしてくれているのは有り難い。（Y．I）

●原稿を募集しています。

「各地のたより」「私の証」「職業と信仰シリーズ」などの原稿をお送り下さい。その他「聖徒の道」にまつわる思い出，感想文もお待ちしております。カットも大歓迎。12月号掲載分締切は10月20日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入して下さい。宛先：〒106　東京都港区南麻布5―10―30　末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。

●教会機関誌（英文）の購売について

「英語版『聖徒の道』の購読はどのようにしたらよいのですか」との問い合わせがしばしばあります。「聖徒の道」のローカルページを除くほとんどの記事は，英語版の大人向けの教会機関誌「エンサイン」(Ensign)，青少年向けの「ニュー・エラ」(New Era)，子供向けの「フレンド」(Friend)から取り上げられ編集されています。それらの月刊誌を購読御希望の方は，外国替為を扱っている銀行で小切手を発行してもらい，下記のような注文書を書いてお申し込み下さい。小切手は「Church Magazines」を受け取り人として下さい。なお小切手発行の手数料は１件につき2,500円ですので，何人かの分をまとめて送った方が得でしょう。

あて先：Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150 U.S.A.

★注文書の書き方

Please send

□ENSIGN　for__year(s) at $9 per year

□NEW ERA for__year(s) at $7 per year

□FRIEND　for__year(s) at $7 per year

for a total of _____

Address _____

Name _____

Please start with the____(mo／yr)issue

末日聖徒イエス・キリスト教会
浦和ワード部
付属図書館

●東京東ステーキ部センター

（1980年10月８日完成）
東京都江戸川区西小岩５－８－６
TEL　03－671－5999

◇敷地面積：2817.8㎡
◇延べ床面積：986.71㎡（１階床面積618.71㎡，２階床面積368㎡）

聖徒の道 1983年10月20日発行（毎月1回20日発行）第27巻第10号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可